

真剣で布仏家長男に恋
しなさい！

仏のマスター

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

布仏君の武者修行を描いた作品です。

日本あちこちで色んな武士（娘）たちとの戦いを通して、彼が成長していく物語です。

学園編スタート??（2022/2/13）のほほんさんは出るよ♡

これは、私が連載で書いているインフィニット・ストラトスが原作の「布仏家長男のIS物語」の主人公布仏君の外伝的なモノです。＋アフター集も別途あります☆

「元の方、進めようよ!!」

おう……書きます。書きますからその刀をお納め下さい……

特に本編でキャラがクロスすることはないですし（後書き狂化除く）、ISも出てこな

いので、原作はこちらにしました。駄文ですが、宜しければ暇つぶしに読んで貰えたらと思います。

「ヒロインはっ！」

2018/2/11に短編から連載へ——増える予定です！

元をメインに、たまに余裕のある時にこちらも連載していく予定です！

本編より後書きに力入れてる時あり。

では、

「ゆっくりして行ってね〜」

2017

12/19 短編完結しました！

12/27 (追加) 短編百代エンド作成開始↓

12/30 完了！

2018

02/11 再始動連載開始！

07/06 手直し開始！ 注※短編一部と本編以降を少しずつ手直ししています。

短編二話以降一部は敢えて、あの頃はこんな感じで書いてたなあ〜と分かるように(駄

文成長記録)そのままにしていますのでご了承ください。

0 2
2 /
0 8

2 0
1 9

完結！

目次

短編く布仏海人修行録く	1
短編くvs川神院く	4
短編く更なる高みへとく	9
短編続きく高みの先にく	16
短編続きく百代エンドく	20
本編はここからく ◇一話 武者修行!?	29
二話 最初はどこへ??	33
三話 黛流剣術道場	37
四話 海人vs由紀江	42
五話 海人vs剣聖	46
六話 次はどこ行く? いや、分かって	

ますから!?	52
七話 京都散策	57
八話 デート? 「違うから!」	60
九話 燕戦開始!	65
十話 海人vs燕	68
十一話 三人目はく君に決めた☆	72
十二話 燕殿く!!	76
十三話 ツナギ	81
お気に入り100人突破を感謝して☆ 「真剣で筋肉に恋しなさい!!」	84
十四話 京戦開始!	94

最終話	海人 v s 京くそして川神へく	98
筋肉エンド	前編	105
筋肉エンド	中編	109
筋肉エンド	後編+	118
学園編	一話 武士道プラン	127
学園編	二話 3—〇入学	131
学園編	三話 四天王	134
学園編	四話 決闘	138
学園編	五話 V S 相撲部&柔道部	142
学園編	六話 V S 空手部&弓道部	147
無駄コラボ(笑)		147

学園編	七話 ドイツ軍ネタ	153
学園編	八話 のほほんさん現る!	159
学園編	九話 椎名京	163
学園編	十話 大和攻略作戦	167
学園編	最終話	171

短編く布仏海人修行録く

場は神奈川県川崎市、日本で武の総本山とも言えるその場所に一人の少年が降り立つ

……

※海人は百代や燕などと同い年で、これは原作開始前の話になります。

真剣で布仏家長男に恋しなさい！ く布仏海人修行録く

「ふうくやつと着いたはいいいけど……川神院ってどこにあるんだ？」

駅を出たはいいものの、初めて訪れた場所に右往左往する海人。

中学最後の夏休み、彼は（一部の猛反対があつたもの）父親の言いつけにより日本全国武者修行の旅に出されました。

「んくデカい気を沢山感じるのは……二カ所か。少なくともあのデカいビルでは無いだろうから、こつちだろうな！」

自分の感覚を頼りに川神院へと向かう海人君。場は変わり、河川敷へと移ります。

「この辺はのどかな場所だなあ〜あ、カルガモの親子がいる！ かわいいなあ〜『ちよつとそこのボク〜イツ』——ビクッ！」

「こんなとこで独り、何してるのかしらん？ 良かったら私とお話しし・な・い!?!」

「……………」

言葉にならない海人君。目の前にクネクネと奇怪な動きをする変態が現れた。

そこは川神名物【変態橋】の上だったのである……

変態のターン：特殊能力（魅惑のダンス）「うっふくん★」

「ぐはあっ!!!」

海人君に大ダメージ！ 効果は抜群だ!!

海人のターン：特殊能力（狂化）「うがああああ!!!」

「グヘッ!!」

激しい衝撃音とともに、見事なまでの掌打が鳩尾へと決まり、変態は下流遙か彼方へと飛ばされ落ちる。

この時、川神市内で何人かの強者が反応をみせる。

「はあはあはあ……な、何だったんだ？ 今のは……」

「す、すごい……!! お兄さん何か武道をされてるんですか!？」

変態の次は海人をキラキラとした瞳で見つめる道着姿の少女が現れる。

「え、えつと……君は、変な人じゃないよね？」

「ち、違います！ 橋で変態に襲われてる人が居たので助けようと……だけど助けはい

らなかつたみたいですね——あ、私は川神一子。今は日課のトレーニング中なんです！」

「ああ、そうなんだ。僕は布仏海人。父さんに言われて武者修行の旅の途中です。川神院に向かつてただけど……もしかして……川神院の人？」

「はい、そうですよ！ 家に行くのなら案内しましょうか？」

「ホント!? 凄く助かります！——あ、でもトレーニングの邪魔じゃ……」

「気にしなくていいですよ！ なら、川神院まで一緒に走りませんか？」

「いいね！ ウォーミングアップがてら、ついて行かせて貰いますよ」

「言つたわね、これでも足には自信あるんですよ私！」

こうして走り始めた二人……始めは様子を見ていた一子であったが、次第にペースを上げ、川神院に着く頃には全力疾走になっていた一子である。

因みに海人は少し疲れたくらいだった。

「か、海人さん……全然余裕そうですね……」

「鍛えてるからね！」

一子の案内で川神院へと到着した海人。そして、それを建物の影から眺める黒い影。

次回、真剣で布仏家長男に恋しなさい！ vs 川神院 vs 「出し惜しみは止めます。こ

こからが本番です……」

短編～vs川神院～

川神一子の案内により、川神院に到着した海人。

「へえ～ここが川神院かあ～（ん？ 誰かにみられてる？）」

「……………（ほお～わしの気配に気づくか～ふむふむ）」

「一子殿、おかえりなさい。そちらの少年は？」

「ただいま～厳さん！ この人は布仏海人さんって言つて、武者修行の旅の最中で、家に
来るって話しだったから案内したの！」

「ふむ、かなり鍛えているようだな少年。なんなら私が相手をしてやろうか？」

「ありがとうございます！ 是非お願いしたいです！（この人も強いな……………多分高弟の
一人なんじゃないかな？）」

「ちよ、さすがに厳さんが相手じゃ、海人さんもキツいつて!?!」

「大丈夫！ お互い無茶はしないっ——『いらっしやい、若いの』——なっ!?!」

突如後方に現れた気配に臨戦態勢となる海人。

「ほっほっほ、そげん構えんでいい……………捕つて食つたりはせんぞな」

「……………（簡単に後ろを取られた……………この人次元が違う）」

全く気配を感じる事が出来なかつた事に、海人は驚き、警戒をとけずにいる。

「ふむ、驚かしすぎてしまうたようじゃのうすまんすまん」

「あつ、じーちゃん！　こちら布仏海人さん。川神院の人と試合がしたいらしいの！」

「布仏殿から話は聞いとるよ——『来たら一丁、揉んでやってほしい』——とな」

「ははは……宜しくお願ひします」

「じーちゃんじーちゃん！　私試合してみたい!!」

「うゝむ……一子じゃちと荷が重いのう……」

「うう……」

「案内して貰つた礼もありますし、一子さんとも試合をしたいです！　勿論無茶なこと

はしませんから」

「そうか。じゃが、先ずは川神院の代表者と戦つてもらおうかのう。ルー！　ルーよ、こ

ちらに来い！」

鉄心の呼び掛けとともに、忍びの如く現れるルー。

「お呼びですか？　総代」

「うむ、これからこの少年と試合をしてもらいたい」

「こちらの……ですか？」

「総代！　いくら何でもルー師範代相手は少年がキツ過ぎます！」

「そうよ！じーちゃん！」

「……いけるな？」

「はい。受けさせて頂きます」

ぺこりと頭を下げ、ルー師範代に対し気を解放する海人。

「——ホウ——なるほどネ。分かりました。準備をして来ます」

「海人と言ったか？　主も準備するとよい。一子、更衣所へ案内してやりなさい」

「はい！　こつちですよ海人さ〜ん」

こうして、門下生の見守る中、2人の試合は始まる。

「東方！　布仏海人！」

「はい！」

「西方！　ルー師範代！」

「ハイ！」

「試合始めい！！」

「……………」

「……来ないの力。ナラ私からいくヨ！！」

ルー師範代の繰り出される攻撃を受け流し、隙をみてカウンターを入れる海人の攻防が続く。

「フッ！」

「グッ……イイ一撃だね。だがコレならどうかな？」

ルー師範代の体から気が解放され、体を包み始める……

「……バーストハリケーン!!!」

「グッ……!?!」

とつさに防御をとったものの、防御ごと吹き飛ばされ、道場の壁にぶち当たる海人。

「……………（うくむ。これで終わりかろう?）」

「ああー!!!」

落ちてきた壁の残骸をどかし、叫び声をあげながら立ち上がる海人。

「出し惜しみは止めます。ここからが本番です」

腰に差した刀に手をかけ、居合いの構えをとる海人。

急に変わった雰囲気にも、相手を見据え、己を高めるルー師範代。

「……ハア!! 川神流無双正拳突き!!!」

「我流一閃【刀牙】!!!」

——一瞬の瞬きの間に2人の立ち位置が入れ替わる——

「勝者！ 布仏海人！」

川神鉄心の声で勝敗が決したことが告げられる。
場が静寂に包まれた。

次回、真剣で布仏家長男に恋しなさい！

最終回く更なる高みへとく「絶対に強くなつて……」

短編く更なる高みへとく

ルー師範代との試合を終えて…

【??ルート】

「今のでかい気のぶつかり合いは…川神院?! 1人はルー師範代だったが、もう1人は…誰だ?」

「どうしたの、モモ先輩?…って!?!」

「私を差し置いて、楽しそうな事してるじゃないかあ…すまん、みんな! 今日はいもう帰る!!!」

言うやいなや一瞬にして消え去る百代である。

「なんだったんだ? いきなり…」

「ふつ、俺には分かる。ヤツもダークソウルに導かれた存在だったというわけだ…」

「…大和…」

【海人サイド】

「はあく(やつば強かったな…拳での戦いだったら負けてた。)じゃあ次、一子さんいこうか? (「ブーブー」ん?)」

「…（ルー師範代が負けたのにアタシなんて相手にならないよお涙）えつとく」

メール

「今どこ？みんな海人君の帰り待ってるんだからね！さつさと早く帰ってきなさいい！！。#」

「うわあくやバいな…てか着信も入ってるし…」

「（いや、何事も経験よ!!）海t『ごめんなさい！』えつ!？」

「早く帰って来いって催促が…ありまして…一子さんには申し訳ないですがこれまで。」

「あ、はい」

「ふむ、仕方あるまい。気をつけて帰るのじゃぞ！ルーのことなら任せておけ。なに、直ぐに目を覚ますじやろうて。（この急スピードで近づいてる気はモモかのう…）」

「はい！ありがとうございしました!!!（なんか急速にこっちに近づいてるでかい気があるな…汗）」

川神院を発った海人君…その少し後に、一人の少女が舞い戻る。

「おい！じじい!!さつきまでルー師範代と試合してた奴はどこだ!!!」

「彼なら家に帰ったぞ、直ぐに戻って来いと連絡があったらしいからのう」

「クソツ！どっちに行った!？」

「方角的に駅の方かの〜」

「(駅か…) …じじい、どっちが勝った?」

「居合で一撃…彼じゃな。【布仏海人】彼の名じゃ。モモと同一年らしいぞ」

「…ニヤリ」

「ふむ…(彼ならモモに敗北を与えてやれるやもしれんな)」

常人には不可能なスピードで川神院を飛び出し海人の元へと向かう百代であった。

…

「ん? んん? (何かものすごいスピードで近づいて来るぞ?!)」

「ぬ〜ほくと〜け〜かいと〜!!!」

キーンザザッ

「…(ダメだ。これ絶対関わっちゃだめな人だ…)」

「はあはあ…布仏海人だな!! 私と勝負しろ!!」

「イエ、ヒトチガイデス。」

「その肩に担いでるの刀だろ? 隠しても無駄だ。それに今おもいつきし目そらしただろ

?」

「…はあ。今急いでて時間ないので無理です」

「なら一撃でいい! ルー師範代にやったやつで!!」

「…（鉄心さん、恨みますよ〜）文句なし一撃のみですよ」

「（やった☆）ああ…川神院川神百代だ！じゃあ、早速…川神流無双正拳突き!!!」

「布仏海人…いざ…」

カチャツ

そういつた瞬間、一陣の風が百代の横を通り抜ける。

「（見えなかった…てか私斬られたのか？）…：…斬られてない？」

「いえ、斬りましたよ、あなたのシャツの首もとの一つを」

言われて、首もとを確認する百代。するとボタンが一つ外れ、無くなっていた。

「ツツ…!？」

気付くとともに全身から汗が吹き出る百代。

「ははは…これが死合だったら、私の首から上は無くなってたって訳か…」

「女の子を道端で気絶させて、放置もまずいでしょうからね〜」

「…（しかも、女の子扱いまでされて…）完敗だ。」

「落ち込んでるとこすみませんが、時間がないので俺はこれで!!」

走り去る海斗君。

「あつ…また必ず私と戦ってくれ！次会うまでに絶対に強くなって今度は私が勝つてやる!!!」

後ろ手に手を振る海人君の背中をじっと見つめ、少女は新たな決意とともに自らも歩み出す。

「布仏海人か……ふふふ……次に会うのが楽しみだ。*」

その後彼女は【武神】と呼ばれるようになり、世界中から恐れられる存在になるのはまた別のお話し〜

お・ま・けエピソード

【百代サイド】

「ただいま……」

「帰ったかモモ。（顔付きが変わつとる。どうやら良い方に転がったようじゃの）」

「じじい、真剣（まじ）で稽古つけてくれ！強くならなきゃいけない理由ができた！」

「ふむ、負けを知り、己の散漫さを知ったか……彼に勝つにはかなりの努力が必要となるぞい。にやり」

「ドンと来いだ!!!（強くなる！そしてアイツに勝って、アイツを私のモノに……つて私は何を考えた!?!*ち、違う！アイツは私のライバルで。*……）」

突如、耳まで赤くし俯き始めた孫の姿に「ほっほっほ、曾孫を見るのも夢じゃないかものお〜」と笑顔になる川神鉄心がいたとやら〜

【海人サイド】

ガラガラ

「ただいま〜」

ダダダダダツ！

「遅いわよ（よく）！海人君（おにいちゃん）！！どこ、ほつつき歩いてたのよ（んだよ）！！」

「お、お帰り…海兄」

帰宅早々熱烈な歓迎にてんやわんやになる玄関での一幕である。

「海人」

「…父さん、それに姉さんも」

「勝つてきたか？」

「危ない試合も幾つかあったけど、一応全勝だったよ！！」

「そうか…よくやった。（さすが俺の息子だ☆）」

「お疲れ様、海人。はい！2人とも離れなさい！！海人はとりあえずお風呂に入ってきたさい。その後に夕食ね」

「海人君一緒に入りましょ☆お背中流してあげるわ！」

「ダメ〜！おにいちゃんの背中が流しますからあ〜」

「。。 * (わ、私は…む、無理だよ)」

「あはは〜 (勘弁してくれ〜)」

ガシツ×2

「い・き・ま・す・よ」

ズルズル

「ああーれ〜〜」

姉パワー恐るべし…

「ははは…」

「鉄心殿からお礼の電話があったぞ。孫がやる気を出して修行熱心になったとな!

あと…孫の婿養子にどうかと「ピクツ!」いう話しがきたんだがお前何をした?」

「えっ? 普通に試合しただけだよ! (鉄心さんまた余計なことを…)」

「…婿養子 (駄目! そんなの…みんなと緊急会議だね。 #)」

「(に、睨まれてる)…ち、違うからなあ〜!!!」

完

短編続き～高みの先に～

「はい、布仏です」

「いきなりすまんのう。川神じゃ、今よいか？」

「はい、かまいませんが……どうされました？」

「急で悪いんじやが、8月31日の休みに海人君を借りれんかのう？」

「本人次第ですが……内容としては？」

「8月31日がモモの誕生日でな。その日にサプライズで海人君との再戦をさせようとな」

「あれから一年しか経ってませんが、早すぎませんか？」

「天武の才を持ちながら、修行嫌いだったモモが一年真剣で修行したからのう。本当なら農としても数年は先を見とつたのじやが、あの成長速度には驚いたわい！」

「それほどですか……あ、海人！ ちようど良かった。ちよつと来い！——『何、父さん？』——電話代われ。鉄心殿だ」

「御電話代わりました」

「おおく海人君か。久しぶりじやの！ 急で悪いんじやが……8月31日は空いてない

かの？ モモへのサプライズバースデープレゼントとして、海人君との再戦をお願いしたいのじゃが」

「百代さんとの再戦ですか!? 一応その日は空いてますが……大丈夫でしょうか?」

「心配せんでも今のモモなら気を抜けば負けるぞい。既にルーを越えておる」

「——!?———そうですか。その話し受けさせて頂きます!」

「そうか……ありがとう。準備はこちらで済ましておくから、当日昼過ぎに川神院に来てくれればオーケーじゃ。詳細は追って連絡する!」

「了解しました! こちらもそれに合わせ調整しておきます」

ここうして決まった2人の再戦……勝利の女神はどちらに微笑むのか!?

「受けたんだな」

「うん。向こうもマジで修行積んだみたいだ……多分ちよつとでも油断したら負ける……」

「そうか……日にちは少ないが色々と対策を練るぞ!」

「はい。父さん!」

「モモ、ちよつと良いか?」

「はい、何ですか？師匠」

「8月31日の昼過ぎじゃが空けておけ」

「その日は…夕方からファミリーが誕生日を祝ってくれるらしいので、それまでなら…」
「それで構わんよ。最悪時間切れ引き分けでも良からう〜モモ…修行は怠るなよ」

急に厳しい眼差しで百代を見る鉄心。それを感じ取った百代。

「…強いのか？」

「気を抜けば負けるぞ…とだけ言っておくかのう〜」

「…ニヤリ（久しぶりの強者との対戦か、腕が鳴るな★）」

「ふむ。（試合と聞いても、良い闘気を纏うようになったのう、こりや儂の引退もそう遠くないやもしれんな…）」

そして迎えた試合当日

「わざわざ俺を呼び出すつてことは相応なものは期待して良いんだらうな？鉄心よ」

「期待に添える相手を用意したつもりじゃよ。すまんが今日はよろしく頼むぞい」

「師匠！相手はまだ…つてヒュームさん！まさかの相手はヒュームさんつてやつですか
!？」

「焦るな赤子。俺は立会人の一人として呼ばれただけだ…後これは俺からのパースデー

プレゼントだ」

籠一杯に入ったフルーツ盛り合わせを渡し、百代を見る。

「ふむ、良い気だ。期待しているぞ」

「はい！ありがとうございます!!」

百代が元氣よく返事したところで門が開かれる…

「来たか!?（つてこの気は…）」

「はあはあ…遅くなり申し訳ありません！布仏海人参りました!!」

「海人…ははっ、これはとんだサプライズだな★」

「喜んで貰えたようじゃのう〜」

「師匠！海人との再戦は数年先だつて…!」

「それだけモモが努力したということじゃ！胸を張って彼と戦うが良い」

「!?…はい!」

温かく2人を見つめる鉄心。戦闘開始まで後わずか…

次回、真剣で布仏家長男に恋しなさい!〜百代エンド〜「お前を私のモノにする!!!」

短編続き～百代エンド～

「ははっ、まさかこんなに早く再戦できるとは」

「ですね、鉄心さんから電話貰った時は驚きましたが、こうして向かい合えば納得しました」

「お前に勝つために努力したからな！」

「俺だつて修行を怠つた日は無いですよ！」

「そ、それでだな海人…！つ賭けをしないか？」

「内容にもよりますが…良いですよ」

「そうか！なら…布仏海人！私が勝つたらお前を私のモノにする!!!」

「は、はああ!?!いや、それはさすがに…」

「私じゃ不満だと言うのか!!#」

「いや、百代さんみたいなキレイな人に言われれば、嬉しくはありますけど…」

「キ、キレッツ…*なら良いじゃないか！因みにお前が勝つたなら…わ、私がお前のモノになつてやる。*」

「いや、結果一緒じゃね!?!」

「なら、どうしろって言うんだ!？」

「ぎああぎやあと騒ぎ合う2人に周りは…」

「おい、鉄心。俺はこんな赤子共のラブコメを見せられる為に此処に呼ばれたのか?」

「ほっほっほ、ちよつとした余興とでも思っておいてくれてかまわんよ。はあく若い頃を思い出すのう〜お主も昔はマーp…『テツシン』むっ?」

「アイツ等の前に先に俺たちで一戦殺るか??#」

「ほっほっほ、遠慮しておこうかのう〜」

「若いつてイイですネ〜」

「あはは…(何かアタシー人場違いな気がするよお〜涙。でもお姉さまも海人さんも頑張ってる!)」

「周りは周りで盛り上がっているようである。」

「とりあえず!この話しは一旦元に戻して…」

「ダメだ!!」

「(あくこのままじゃ埒があかないよ〜)じゃあ、こうしましょう!俺が勝ったらこの話しは一旦無かったことに、百代さんが勝ったらとりあえずお友達からって事で!実質、俺らってまだ会って二回目でお互いの事大して知らない訳ですしね」

「む〜分かった、それで良い」

「話しは纏まったかの？」

「はい……」

「ふむ、それでは両者前へ！」

2人が練武場にて向かい合う。

「東方！布仏海人！」

「はい！」

「西方！川神百代！」

「はい！」

「試合始めい!!」

「出し惜しみは無しだ！最初から全力全開で行く!!」

（凄い気だ……悔しいけど気の総量じゃ負けてるな。）フツ……

構えをとった2人……それは1年前河原での場面と同じ構えであった。

「……川神流無双正拳突き!!!」

「……我流一閃【刀牙】!!!」

両者の立ち位置が変わる。

「クツ……」

百代が膝を付く……

「フツ…（危なかった。先に当たって無かったら完全に届いていた）」

自身の胸を押さえ、響いた衝撃に一汗を垂らす。

「やっぱスピードでは負けるかあゝでも今回は見えた…次は当てる！」

「やはり立ちますか…それに『瞬間回復!』やっぱ使つて来ますよねゝ」

「その発言からすると、知つてたみたいだな？」

「ええ、なのでこちら奥の手を出させて貰いますよ」

そう言つて海人は腰から刀を鞘ごと抜き、百代へと投げ、自身も大地を蹴る。

「なっ!? 素手で来るっていうのか? っつて、『雷神掌!!』グガッ!？」

刀を弾いた次の瞬間には懐に入られ、強烈な一撃を受け飛ばされる百代である。

「ツウ!？」

それと同時に腹を押さえ、膝を付く海人…

「あ、アレって最初海人さんと会つた時の…」

「知つてるのカイ? 一子。」

「うん、初めて海人さんに会つた時、あの技で変態を川に叩き落としてたわ! お姉さま大

丈夫かしら!?! けど海人さんも何か苦しそうだけど…」

「カウンターでモモの膝が入つたからじゃろうな」

「そうなんだ…アタシ全然見えなかつた。」

一進一退の状況が続く中…

「だあ!!…瞬間回復!…って回復しない!？」

「ふう、上手くいったようですね。そう何度も回復されちゃあこつちの身が持ちませんから〜」

「ははは、瞬間回復すら封じてくるなんてな…やっぱ海人！お前は最高だ!!ますます欲しくなったぞ!!」

「それはどーも★俺としても負けるのは嫌なんでね!!」

今度は海人からの連撃が始まる。スピードの乗った連撃に防戦一方になる百代。一瞬の隙を付き、反撃するもの…

「取った!」

投げ技からの関節技で、腕を決めた海人。

「チイ、柔術かつ…」

「早めのギブアップをお勧めしますよ」

「ふ・ぎ・け・るなああああ!!!『ヤバッ?!』」

急に百代の体が光り出し、大爆発を起こす。

「ふう〜ヒュームを呼んどいて正解じゃったわい!」

「あわわわわ、2人とも大丈夫なのかしら!？」

「…」
「派手にやり過ぎヨ！百代！」

…

煙がはけ、2人はまた最初の様子に向かい合っていた。

「はあはあ…自身で爆発とか反則でしょ!!」

「はあはあ…川神流人間爆弾！これが私の奥の手だつ!!」

「はあはあ…（今の一発でこっちはボロボロだよ…）」

「はあはあ…（左腕が言うこと聞かない…さっきの関節技か…）」

「フツ…次で決めるよ百代さん」

「ああ、私ももう持ちそうに無いしな」

一時の静寂が訪れ…そして時は再び動き出す。

「…川神流無双正拳突き!!!」

「…無拍子!!!」

互いに突き刺さった渾身の一撃…静寂の中、膝を付いたのは…

「勝者…川神百代!!!」

「勝ったぞ！このヤロー!!!」

拳を高く上げ、叫ぶ百代：…そして直ぐに緊張の糸が解けたの如く海人の隣に倒れ、意識を失った。

「とりあえず、2人を運ばんとの…ルー手伝ってほしい」

「分かりマシタ」

「鉄心：俺は帰るぞ」

「今日はすまんかったな。助かった！」

「構わん。良いモノを見せて貰った…百代におめでとうと…あと布仏海人に職に困ったら何時でも九鬼に來いと伝えておけ」

「いやいや、家の大事な婿候補じやからのうくほっほっほ」

それを聞くとヒュームはスツと消えていった。

「これで老後も安泰じやなっ!!」

真剣で布仏家長男に恋しなさい！～百代エンド～

【エピソード】

「どうしてこうなった!?!」

「なんだ不満があるような言い方だな?」

「当たり前だ!卒業式終わって帰ろうとしたら、いきなり父さんと鉄心さんに強制連行

されて、着替えさせられて、これだ！」

現在、海人君の目の前には白無垢を着飾った百代ちゃんがあります。場所は川神院です。

「私では嫌ですか…?」

涙を浮かべ、上目遣いに海人を見る。

「うっ。。い、いやそんな事はない！」

あの試合の後、2人は所謂「結婚を前提としたお付き合い」を始める。(お友達から)外野が少し…いやかなり騒いでいた様ではあるが…無事?この日を迎える事となりました。

…

「その…凄く綺麗だ…百代」

「ありがとう。海人」

「準備が出来たみたいです!お姉さま、海人義兄さま!」

「つて!?!一子ちゃん気が早いって!!」

「そんなことはありません!さあ皆さん待たせておりますよ。行きましょう、あ・な・た

」

「なっ!?!…くっ。。*」

り。
ドツタバツタの式が始まり、皆から祝福される2人…これにてこの物語は本当の終わ

愛し合う2人に幸あれ☆

百代エンド～お前は私のモノだ!!!
～

本編はここからく
>◇一話 武者修行!?

「海人来たか……」

「父さん、話があるって聞いたけど」

父さんと呼ばれて、道場へとやってくる。しかし、これから言われる事なんて微塵も考えていなかった俺は、いつものように新しい任務かと思っていた。

ニコツと笑顔で大きなリュックと封筒を渡された俺は「えっ?」と疑問顔で父さんを見る。

「日用品の一式と旅費だ! 服は自分で追加してくれ!」

「いやいやいや! 何なの!?! 先ずは詳細を話してよ!!」

「そうだな。海人、武者修行の旅に行つてこい」

「……………? はあああああつ!?!」

く真剣で布仏家長男に恋しなさい!く

出発日当日。

父さんの武者修行発言のあとに……ウチの姉妹や幼馴染姉妹が乗り込んで来て、一悶着……いや、二悶着あったけれど、この日を迎える事となった。

「とりあえず、リストに書いてるところには連絡してあるから、最低でもそこは回って来ること! あとは『海人君(おにいちゃん)』!!!』ドガン!! あべし!」

「何黙って行こうとしているのよ(してるんだよ)!!」

「はあはあ。海兄……黙って行くのはひどいよ……」

「簪様大丈夫ですか? 海人……一言くらい言ってから行きなさいよね……」

「えつと、ごめんなさい。夏休み初日早朝から起こしたら悪いかと思つて(父さん大丈夫かな?) あ、動いてるから大丈夫そうだな)」

「黙って行く方が問題(よ)(だよ)!!!」

「はいはい、とりあえず落ち着いて下さい! 3人とも」

「む〜」

お怒りモードの3人をたしなめて、クルツと回つてこちらを向く虚姉さん。

「海人……気をつけて行つてらっしゃい」

「おにいちゃん……早く帰ってきてね!」

「海兄……怪我には気をつけて……」

「ごまめに連絡はしてよね! じゃないと、みんなで追いかけ——『刀奈様? ニコツ』

……いや、連絡するから」

「お、おう。途中経過でも報告しますね! じゃ、じゃあ行つてきます!!」

そういつて、俺は家を飛び出した！ 俺が見えなくなるまで手を振ってくれるみんなを背に……

「ああ〜行っちゃったわね……」

「夏休み……海兄と遊びたかったなあ」

「はい！ 見送りの終わった事ですし、今日の分の課題終わらせますよ！」

「ええ〜初日くらいは休みましようよ〜」

「そうだそうだ〜」

「……虚さんは、海兄が居なくなって寂しくないの？」

「私は……海人の成長の為ならば、黙って応援します」

「何回も、おにいちやんの安全祈願に行つてたよね〜ニヤニヤ」

「本音?! 余計な事は言わないの!!」

「『そうなんだ……』」

「ああ〜皆の心配も何だが、あいつはいつも通りニコニコしながら普通に帰つて来るさ！ もしかしたら女の1人でも作つてきたりしてな!! リストアップしたところには若い武士娘もいたはずだし」

「——おじ様？ 冗談でも言つて良い事と、悪い事がありますよ？ ニコニコ」

「——若い武士娘……詳細詳しく……ニコニコ」

「え〜更識のお嬢様方？ 何か背中から黒いオーラが……」

「……………」

「おい！ 虚、本音！ 何とかしてくれ!!」

「ツーン。ていうか、わたしも気になるんだよぉ!!」

「知りません」

更識姉妹に両腕を、背中に本音もへばり付き連行される布仏父……

「お父様は、いつも余計な一言が多いのよ……」

そんな4人を見ながら、ボソツと呟く虚さんでした。

二話 最初はどこへ??

さて、いざ出発したは良いけど、どこ行こうか？

日本地図にリストアップされた場所をチェックしてみる。一応考えてくれたのか、殆どが近場の有名な武術家の方々に、遠いのは東北の剣聖黛十一段の所と、京都の松永家みたいだ。

川神院はくやつば最後だよな。

リストの人たちを回るだけでも結構キツキツじゃないかなこれ？ 学校の宿題をする日程とか、少しくらいは遊ぶ日程を考えないと……（特に後者は作らないと、三人に何言われるか分かったもんじゃやない……）

取りあえず遠くの二件を済ませる方向かなあ……

コインをトスする。表なら黛家、裏なら松永家。あとは連絡取ってみてイケるなら行く！ 日程が合わないのなら、途中のリストアップに行くのも有りだしね！

ピンと空へあがったコインの結果は……

「はい。黛ですが？」

「こんにちは！ 布仏海人と申します。大成さんはいらっしやいますか？ 武者修行の件でお電話させて頂きました！」

「武者修行？ えっと……あ、丁度お父さんが戻ってきたので代わりますね」

「お父さん。布仏海人さんって方から武者修行の件で電話が」

「ああ、早速連絡してきたのかい？ うむ、代わろう」

「代わりました。大成です」

「初めまして！ 布仏海人です。えっと、急なお電話失礼します。その……」

勢いでいこうとした海人であったが、いざ大成と話し出すと、緊張して言葉に詰まってしまう。

「武者修行を父上殿から言われたのだろう？ 話しは聞いてるよ。まあ、初っぱなからウチに来るとは思わなかったが……何かあるのかね？」

「い、いえ！ 遠いところから攻めようと……いや！ 私も剣術をやっていて、黛十一段に御教授願いたい！ 戦ってみたいと前々から思っていましたので!!」

「ふむ……そうか。それで何時頃にこっちに着きそうなんだね？」

「えっと、本日伺って大丈夫そうなのですか？」

「構わないよ。事前に連絡がある分まだましき……道場破りの連中なんかはいつ来るか分からないからね」

「そうですか。夕方までには到着出来ると思うのですが、よろしいですか?」

「分かった。こちらでもそれくらいに用意させておこう」

「(……させて?) よろしくお願いします!」

こうして武者修行一戦目の相手が決まった! 劍聖黨11段……正直実力では向こうが遥かに上だろう。胸を借りるつもりで挑もう!!

「——お父さん、電話の方は今から来るの?」

「ああ、夕方くらいには着くそうだ」

「声からして、結構若い方を感じたけど……」

「中学3年と聞いてるよ」

「へえ」

「なんだい? 興味でもあるのかい?」

「違う。同年代の男の子に、お姉ちゃんがちゃんと対応できるか心配なだけ……」

「ああね。まあ、何とかなるだろう! 劍を持てば自ずと体が付いてくるだろうさ」

そんな2人に接近する影が一つ。

「父上、沙也佳、早く来ないと朝食が冷めてしまいますよ!」

「丁度良かった……由紀江、今日の夕方は空けておきなさい。お前の対戦相手が来ることになった」

「は——はい!? 対戦相手って……試合ですか!」

「うむ。年も近く……由紀江の2つ上か。あちらも剣術を嗜んでいるとのことだ」

「そ、そそそんな私のような者が相手など!! それに同年代の方って」

「まゆつちい! これはお近づきになるチャンスだぜ! 刀を交わして、お友達ゲットだ!!」

「そんな松風……まだ会ったことも無い方ですのに……」

「お父さん……大丈夫だと思おう?」

「う……うむ?」

双方に何か食い違うものを感じながら話しは進みます。はたして海人君の初戦は無事に勝利といくのか? それとも……

三話 黛流剣術道場

空が夕焼け色に染まり始めた頃、俺は目的地に到着した。

【黛流剣術道場】

確実に格上の相手……勝てるなんて思わないけど、一矢報いたいところだな。

「すみませーん！ お電話差し上げていた布仏です！」

「——はーい！」

若い女性の声とともに扉が開かれる。

お父さんの言つてた対戦相手が来たみたい。

「さ、沙也佳！ どうしましょう!? 布仏さんが来てしまいました!!」

「お姉ちゃん……どうしたもこうしたも、さっさと準備して道場に行つてお父さんとウオーミングアップでもしたら？ 私が対応しとくからさ」

「は、はい！じゃあ私は先に道場に行つてますね!!」

「いくぜ！ まゆつちい。試合に勝つて、更には宿敵と書いてトモダチもゲットだぜい!!」

「はい。松風!! 私頑張ります!!」

後ろから聞こえる姉の発言に……大丈夫だろうか? と心配になる私だった。

扉を開けると、私たちときほど変わらない男の子が立っていた。何か弱そう……:これなら、お姉ちゃんの圧勝かなと思っていた。そんな私を叱ってやりたいと、後の私は思うのだった。

「こんばんは。父から話しは聞いています。案内しますので中へどうぞ」

「失礼します! (かわい子だなあ) 話しに聞いてた娘さんだろうか? それにしては

闘気はあまり感じられないけど……)」

「(何か見られてる?) えっとく何か?」

「ああ(ごめん)なさい! 黛十一段の娘さんですよね? ウチの父から娘さんも武術を

習っていて、かなりの腕前と聞いていたので」

「ああ、私は妹の方で、武術はたしなむ程度です。本格的に学んでいるのは、この後あなたと戦う姉の方ですよ」

「あつ、姉妹だったんですね——ん? この後戦う?」

「どうしました?」

「今日の試合って、誰と誰が戦うって聞いてます?」

「布仏さんと姉が戦うと聞いてますが?」

「ここにきて勘違いに気づく海人。」

「いや、俺は黛十一段と試合のつもりだったんだけど……」

「——お父さんと!? それはさすがに無謀ですよ! 危ないですって!!」

「確かに勝てるなんて思っただけじゃないけど、何かその反応ひどくない……?」

「お姉ちゃんならともかく、お父さんとは——いや、布仏さんの為を思っただけ!!」

「大丈夫。こう見えて結構強いから俺!」

「そうこうしている内に道場へと到着する。」

「お父さん。布仏さんを連れてきたよ!」

「うむ。入りなさい」

「ドキドキ『落ち着けくまゆつち。オラが付いてるぜい!』」

道場内へ入ると、写真で見た黛十一段と道着を着込んだ一人の少女が居た。

「いらつしやい。何だか賑やかだったけど……早速、沙也佳とは仲良くなったのかい?」

笑顔の下に黒いオーラを感じるのには気のせいかな? うん。気のせいだ!

「い、いえ、ちょっと勘違いがあったみたいで……あつ、布仏海人です! 本日は急な対

応ながら受けていただきありがとうございます！」

「夏休み中に来るとは聞いていたからね。もしかしてウチが最初？」

「はい。一番自信のある剣術でどこまでやれるかを知りたかったので、まず黛先生のところに行こうと思いました！（さすがにコイントスで決めたなんて言えないよ）」

「ふむ、では早速やるかね？ アップは終わってるようだし」

「はい！ 駅から走って来たので、いつでもいけます！」

「由紀江も良いかい？」

「は、はい！ 大丈夫です！」

「あ、あの！ よろしければ由紀江さんの後に、黛先生とも一戦お願い出来ますか!？」

「構わないが…試合となると私も甘くはないぞ？」

急に剣気を向けられ一歩さがってしまう。あれ？ 微妙に怒気を感じるのは気のせい
いか？ うん。気のせいだ！

負けじと剣気を出し押し返す。これぐらいで飲まれるわけにはいかないからね。

「はい。よろしく願います！」

「…ふむ。由紀江、始めから全力で行きなさい」

「はい。（悔しいですが…：どうやら彼の方が、遥かに格が違ったようです…）」

「両者前へ——試合始め！」

武者修行第一戦の始まりである。
因みに武器は真剣ではなく木刀です。

四話 海人 v s 由紀江

開始と同時に叩きつけられたら剣氣に一瞬だが油断してしまった……とつさに後退しながら斬撃を受け流し、何とか直撃は避ける。

さつきまでのアタフタとした雰囲気は嘘のように、鋭く研ぎ澄まされた美しい剣氣だ。まさかここまでとは……こちらも氣を抜くわけにはいかない！

「先ほどのを全て受け流しますか……」

「正直危なかったよ」

お互いの口元がフツと笑いあつた氣がする。

「次は俺からいくよっ！」

「クツ……（速い!? 剣速も相手の方が上——乱打戦になるとまずい!）」

相手の上段切りを流し受けながら、そのまま巻き付けるように上段切りで返す。とつさのバックステップで肩にかするだけに終わるが、逃がさない。

「我流突閃・星突! ※」

「ツグ——アツ!!」

5連続の突きの内、当たったのは左肩と右腰の二つか……三つも防がれるとは思わな

かった。

この子は間違いなく原石だろう。間違いなく数年後壁を越えてくる素質を持つてる。ただど今はまだ負ける訳にはいかない！ 本命はまだ次に居るからね！！

「まだ……いけます！」

更に構えを下げてきた……狙いは何だろうか？ 木刀を中段に構え迎え撃つ。

「いきます——黛流・紫電三突!!」

正中線を狙った高速の三連突きがくる。一突き目を見切り首だけをズラして避け、二突き目は木刀で横に弾き、三突き目をいなしながら……

「我流一閃・龍牙!!※」

カウンターで木刀を顎に当たる直前で寸止めし、相手を見る——一呼吸付くとともに相手の「参りました」の一声で決着。

「両者開始位置へ……勝者、布仏海人!!」

「ありがとうございます!」

負けた……お姉ちゃんが……正直最初はお姉ちゃんの圧勝だと思っていたけれど、終わってみれば……私の読みは大きく外れてしまった。

試合中の布仏さんは全くの別人に見えた。お姉ちゃんもだけど、戦ってる2人はとて

も眩しく見えて、私も混ざりたいと願ってしまった。

だけど、たしなむ程度の私の実力じゃ二人の間に入る余地はなく、自信もない。こうして眺めているしか出来ない私に——少し苛立ちを覚えた。

出ききった……今の私に持てるモノを……それでも、あの方は私の更に上をいかれていました。

木刀を握ったその瞬間から一瞬にして変わった……まるで父上と対峙しているかと勘違いしてしまった程でした。

私は全力でしたが、彼はまだ余力を残していた様に感じました。もしかしたら父上も——いえ、それはさすがに無いでしょう。

生まれて二年の差……二年後、私は今の彼と同じ高さへいけるのでしょうか？

「……………(なるほどね。剣術に関しては既に壁を越えて、達人の域にいるか……私もうかうかしていたら、負けてしまいそうだよ)」

「黛先生！ 次お相手お願い致します!!」

「む？ もうかい？ 少し休憩を挟もう。お互いベストの状態でやりたいからね」

「——分かりました」

「沙也佳、お茶の準備をしてくれるかい？」

「えっ？ あ、はい。分かりました！」

小休止をはさみ、次は海人君本命の黛十一段との一戦です。はたして結果は……如何に!!

技についてのオマケ

※我流突閃・星突

一本書きで星を描く五点（額・左肩・右肩・左腰・右腰）を連続で突く技……元ネタは某るろうにのあの技——九〇龍〇の5連突きバージョン。原作突入時は何連突きになっっているでしょうか？ 元ネタ原作は突きでなく斬撃でしたがね。

※我流一閃・龍牙

相手の顎目掛けて下から峰を支え切り上げる技……元ネタは上に同じく——龍〇閃

因みに最初の方に出てくる我流一閃・刀牙も……分かる人は分かりますよね〜アハハ……元のISの方に出てくる我流二閃・双牙も所謂——〇龍閃……アハハ〜

因みに星突の手前の攻防も、同作品の某活心流の技からイメージしてます。

五話 海人 v s 剣聖

「さて、一休みしたところで次は私の番かな？」

「はい！ よろしくお願いします!!」

始めから全力全開だ……憧れの剣聖黛十一段との一戦が一発KOとかありえないから！
今度は由紀江さんが開始の合図を務めてくれるようだ。

「由紀江……この試合、一瞬たりとも目を反らさぬように見ていなさい」

「は、はい父上！」

位置につく——合図とともに試合が始まる。

「——つつ!？」

開始と同時に一瞬の攻防。解き放たれた剣聖の剣圧に呑まれ、一手出遅れてしまった……なんとか防御はしたものの壁に吹き飛ばされてしまう。

「黛流・紫電三突」

速い、そして重い。先ほど由紀江さんのを見ていなかったら一発KO決められてたよ！

「防いできたか……一応全力でいったつもりだったんだけどね」

「初見だったらやられてましたよ！」

冗談っぽく笑って返すが、由紀江さんのとはレベルが違う!! ダメだ、正攻法で勝てる道筋が全く見えない……

「お姉ちゃん、今の一瞬に何があつたの？ 私何も見えなかつた……」

「……父上が先ほど私が放つた紫電三突を海人さんに……海人さんは全て防ぎはしたものの威力を殺しきれず壁へ飛ばされたみたい」

「みたい？」

「私も全ては見えなかつたから、会話の内容からの想像で……」

「うわあ……」

その後2人は乱打戦が続いているけど、お父さんが優勢に見える。海人さんはほとんど防戦に回っているからだ。

「あつ、いけない！」

一瞬のスキをつき、海人さんが反撃に出る。だけどそれは誘いの罠で、海人さんの一撃は止められ、父上の当て身によって再び吹き飛ばされていた。

一瞬のスキをついた！ と思ったのは巧妙な罠だった——当て身で返され、肺の空気

とともに一瞬にして吹き飛ばされる。

「だあああああ!!!」

叫び声をあげて勢いよく起き上がり、自分に活を入れる。このままじゃダメだと黛先生に一時中断をお願いし、竹刀袋からもう一本の木刀を取り出す。

「ふむ。二刀流かね? 手数で攻めてくる気かな?」

「宮本武蔵にも憧れてまして!」

そういつて今度はこちらから攻める。決まりはしないものの、ある程度まで返せるようにはなった。

「言うだけのことはあるね……(この年でこの実力……恐ろしいな)ならこちらも数を増やすか」

攻撃をはじめられたタイミングで黛先生がバックステップで距離を取る——追いかけるように距離を詰める俺に……

「黛流・十二斬」

高速の斬撃が一瞬にして襲いかかる——気づけば再び壁に吹き飛ばされていた。

「——はっ!? それまで! 勝者——『待ちなさい』えっ!」

「いくつかは入ったが、決定打になるものは無かった……だろう? 海人君」

「……半分は勘で運良く防いだようなものですよ。ほとんど見切れませんでした」

「運も実力の内さ。さてどうする？　まだやるかね？」

「ではあと一手、まだ未完成ですが奥義を使わせてもらいます」

「奥義ね……変わった構えだね（逆手の居合い？　二刀流の——いや鞘に納めてもないし……）」

「まだ未完成ゆえ、この状態からしか放てないんですよ」

「ふむ。ならばこちらにも奥義をもつて返そう」

お互いに気が高ぶつていく……とりあえずヤバい一撃がくるのは間違いない。だれど一矢報いてみせる！

「牙王」

「阿頼耶」

放たれた二つの奥義——結果は——

ふと目が覚める。どうやら気絶していたみたいだな……

「あつ、目が覚めたみたいですね」

「沙也佳さん——に由紀江さん？」

隣に沙也佳さんと、扉からひよっこり頭だけ覗かせている由紀江さんが居た。

「ほらお姉ちゃん。バレバレだから隠れてないで出てきたら？」

「え?! えっと——わたし、わたし父上を呼んで参ります!!」

「あつ! もう……お姉ちゃんつたら。すみません……騒がしい姉で」

「いえ、それで——試合は」

「正直、速すぎて細かいところまでは分かりませんでした……最後衝撃音とともに二人とも吹っ飛んでダウン。お父さんはちよつとして起き上がりましたけど、布仏さんはそのまま気絶されていて、父上がこちらに運びました」

「そうでしたか……今回は俺の負け——『いや、引き分けだね』黛先生!」

「一瞬とはいえ私も意識飛んでいたからね。驚いたよ! なんだいなあの技は? 一瞬背筋がヒヤリとしたよ……」

「それはこちらも一緒ですよ! 気づいたら布団の上ですから……しかしアレで引き分けなど私としても納得が!」

「いいからいいから。気になるならもつと修行して今度は勝ちに来なさい。海人君との一戦は私としても楽しかったしね」

「むく次は逆に俺が圧倒して勝ってみせます!」

「うむ。その意気だよ! それでだが今日は泊まっていきなさい」

「いえ!!? そこまでご迷惑掛けるわけには!」

「もう今からじゃ終電間に合いませんよ? この辺泊まるようなところも無いですし

……

「……すみません……お世話になります……」

こうして俺の武者修行一日目は終わりを告げた…

「どうだい海人君？ 由紀江の料理の味は？ なかなかのものだろう」

「すごく美味しいです！（料理の）見た目もきれいだし、由紀江さんは将来良いお嫁さんになりますね！」

と2人の会話に顔を真っ赤にする由紀江ちゃんがいたとか。

六話 次はどこ行く? いや、分かってますから!?

知らない天井……そうか昨日は黛先生の家泊らせてもらったんだっけ。んんん六時かあゝ軽く朝練しときますかね!

バツ!と布団から飛び起きる。うん。今日も元気! 昨日の疲労はそこまで残って無いみたいだ。

タオルと水を持って外へ出る。軽く柔軟して——「海人さん!」——振り返るとジャージ姿の由紀江さんがいた。

「おはよく早いね」

「おはようございます……か、海人さんこそ朝練ですか?」

「うん。由紀江さんもこれからかな? 良かったらこの辺のランニングコースを案内してもらえると助かるんだけど」

「——わ、私ので、ですか!?(これはお誘いですよね!? お友達になるチャンスです!!)」

「イエーイ! まゆつちいゝこれはお友達ゲットなチャンスだぜい! てか海人坊も朝からまゆつちをお誘いたあゝいい根性してんじゃん」

「……松風!? いきなり何を言ってるんですか!!」

「あははっ……松風もおはよくでっ、どうかな？」

「……はい、御一緒させて頂きます！」

あゝあ、お姉ちゃんに先越されちゃったなあゝ私もたまには朝から運動しようかと思っただけど……

「ふむ。沙也佳は一緒に行かなくて良かったのかい？」

「うん。お姉ちゃんに先越されちゃ——って！ お父さん!？」

振り返るとお父さんが走っていく二人を眺めていた。

「どうやら由紀江とも上手く仲良くなってくれたみたいだな」

「そだねゝお姉ちゃんにとっては良いライバルというか目標になったんじゃないかな？」

「うんうん。由紀江はこれからまた一層強くなるだろうよ」

競い合える格上の相手かあ……嗜む程度の私じゃそんな接点にはならないし……

「ふむ……沙也佳は海人君が気になるのかい？ 昨日はそうでもなかったが、今は『先越された』って発言もあつたが……」

「えっ!？」

お父さんに言われて顔が熱くなつていくのが分かる……確かに海人さんは強くて格

好いし、お姉ちゃんの松風を、自然と受け入れてくれてるやさしさもあって良い人そうだし、今回の武者修行も家業を継ぐための一環だと言ってたし……実は超優良……
「ああく分かったから言わなくてもいいよ。だが沙也佳に恋愛はまだ早いと思うんだがね……」

「そんなことないよ! 今時、私の周りにだって付き合ってるカップルいるし、私告白されたことだってあるんだから!」

「——なんだと?…… (どこのご子息かな? ウチの沙也佳にちよつかいかけた子は……)」

「それに、お姉ちゃんも多分海人さんのこと……」

「……………」

急に静かになったお父さん。背中に黒い何かが見えるのは気のせいだよな?

由紀江さんと一緒に走るようになった。初めは緊張してか上手く話せなかったけど…… (松風を通しては普通に話せてたのが笑いだころ!) 帰り着く頃には落ち着いて話せるくらいにはなった。

屋敷のままで「これからも——色々と相談にのって欲しいから友達になって下さい!!」と言われ、快くOKした。拳じやないけど、刀と刀を交えた仲……友達と書いてラ

イバルと読むみたいな関係かな？

あと途中、何故か背筋がヒヤリとした時が有ったけどあれはなんだったのだろうか？

そして別れの時……次なる修行場へ！

「次はどこに向かうつもりなんだい？」

「次は一気に京都に向かう予定です！ 昨日の内に先方にも連絡とって、着き次第落ち合う話しになってます」

「そうか……京都というと松永さんとかかな？ ミサゴさんもかなりの実力者らしいけど、その娘さんは天武の才に恵まれた逸材らしいね」

「はい！ 既に壁を越えた実力者だと聞いています。今から相手をするのが楽しみです
！」

父の「娘さん」という発言と、海人の表情に一瞬ムツとなる後ろ二人であったが、笑顔で海人を送り出したのだった。

京都へと向かう新幹線の中。

一発目から良い修行になったなあ〜次の燕さんだっけ？ 壁越えの実力者らしいし、

良い試合が出来そうだし

そうして次の未知なる相手に想像を膨らましていると携帯に着信が入る。

「沙也佳ちゃん?」

届いたメールを開くと、黛姉妹のツーショット写真がどでかく表示され、2人のコメントが添えられていた。

由紀江「もつと修行を積み、次は私が勝ってみせます! また刀を交える機会を楽しみにしております」

沙也佳「また遊びにでも来て下さい!! or 遊びに行ったら観光案内よろしくです☆」
あははっ、うん。良い子たちだったなく次会った時ガツカリされないよう俺も頑張らないと!!

海人の武者修行はまだまだ始まったばかり……次なる一戦も近し!

七話 京都散策

いざー！ 京の都!!

やってきました京都！ 歴史的建造物が建ち並ぶ古き時代を今に残す街。ここに來るのは他流試合で以前來た時以來だくあの時の彼は元氣にしているだろうか？ 武術

……続けてくれていると良いなあ

「さて、駅前のモニユメントで合流って話しだっただけ」

氣を探ってみたもののそれらしき人は居ないようだ……携帯を取り出しミサゴさんに掛けてみる。数回のコールの後に繋がると……

「ごめんなさい！ 仕事が長引いちやって、私が間に合いそうにないの！ 代わりに燕ちゃんに行ってもらったからそつちと合流してもらえろ!？」

「お疲れ様です。分かりました！ それで燕さんの連ら——『ごめんね！じゃあまた後で!』あつ……」

燕さんの連絡先を聞く前に電話を切られてしまった……さて、ドタバタしてたし掛け直すのも悪い気がするが。

「あのかく布仏海人さんですか？」

「ん?」

振り返ると中学の制服を身に纏ったかわいい女の子が首を傾げて立っていた。

「もしかして、松永燕さん?」

「うん! 良かったく人違いだったらどうしようかと思つたよ」

「こちらでも直ぐ合流できて助かりました。ミサゴさんに燕さんの連絡先を聞きそびれたところだったのだから」

「おかんつたら——あつ、海人君つて同い年なんだよね? だつたら別に敬語とか気にしないで良いから!」

「それで——そう? じゃあ普通に話させてもらうよ」

「うんうん。こっちの方が話しやすくもいいよ! さてどうする? 直ぐに向かう?

おかん暫く時間かかりそうだから、少し観光でもして? 私で良かったら案内するけど」

「なら……案内お願いしようかな? 京都は二回目だけど、前は観光する時間も無かつたからなあ」

所用で学校に行った帰り、いきなりおかんから代走を頼まれた……お客さんというか、今度の私の対戦相手らしい。同い年の男の子と聞いて、最初ガツカリしたのは秘密

だ……だって同年代の子じゃ、相手になる子が全然いなかったからだ。

「だけど彼は違った……上手く隠してはいるけど、その気の流れはとてもキレイで力強く、何か惹きつけられるものを感じた。」

「てか!! 何しれつと誘ってるのよ私! 今まで男の子に誘われる事はあつたけど、私から誘った事なんて一度もなかつたし……海人君ものつかつてきちゃつたし! これってデート——いや! お客様を時間つぶしで案内するだけだから違うよね! ですよ、そう!!」

「さて、見てまわるにしても……そんなに時間はないだろうし、駅周辺だと【伏見稲荷大社】とか【東寺の五重塔】……それと【本願寺】辺りかな?」

「その辺は燕さんに任せるよ〜」

「OK! じゃつ、海人君行こうか」

「そうして燕さんの京都散策が始まつた〜ふと気づいたけど、お互いに自然と名前で呼び合つてたな。まあ松永さんとミサゴさんとも被るから丁度良かったかな〜」

八話 デート? 「違うから!」

「五重塔!」

燕さんに連れられ最初に来たのは、東寺にある国宝の五重塔! 過去に数回の焼失で造り直されているものの、その高さや美しさは素晴らしいものがある。

ここにある五重塔は全国にいくつかある五重塔の中でも一番高く、木造建築では一番の高さらしい。

「海人君はこういった歴史的建造物に興味合ったりするの?」

「ん〜普段はあまり意識したりしないけど、こういった場所に来ると興味は湧くし、色々見て回りたくはなるね!」

東寺を出るところで、燕さんが声を掛けられる。知り合いのようだ。

「あれ〜? 燕じゃん! こんなところで会うとは珍し〜い……」

「舞ちゃんに、紅葉ちゃん!? (そーいや、二人の家つてこの辺だったっけ)」

「燕さんのお知り合い?」

「ああ〜海人君。うん。友達で、クラスメートなん——『燕、ちよつと!』って、わわわあ

く

舞ちゃんと呼ばれた少女に連れて行かれる燕さんを見ていたら、隣に居たもう一人の女の子に声を掛けられる。

「もしかして、布仏海人さんですか？」

突然名前を呼ばれた事に驚き、その子を見るもの……ダレだ？記憶に無——いや、何となくが見覚えはあるぞ！

「さすがに分かりませんよね。私、近衛紅葉です。双子の兄の近衛葵を覚えてますか？」

「近衛……葵——ああ！前回他流試合で京都来た時の!! ごめん！ 気づかなかったよ！」

「はい！ 私は挨拶程度でしたので、覚えていなくても仕方ないですよ！私も名前聞いて思い出しましたから！」

「そっか！葵君は元気かな？ 武術は続けてるの？」

「布仏さんに負けて以降、更に修行して実力をつけてますよ！」

「そっか！次に会うのが楽しみだなあ！」

和やかな海人サイドをよそに……

「ちよつとアレ誰よ燕!! アンタが男連れとか!! 彼氏？ 彼氏なの!？」

「ちよ、ちよつと! 舞ちゃん落ち着いて! べ、別に彼氏とかじゃないから!!」

「なら何よ! 難攻不落とも言われるアンタの隣に立つ彼は!」

「難攻不落……(私、そんな呼ばれ方してるの?) 次の対戦相手よ。おかんが迎えに行くはずが、仕事の都合で私に回ってきた感じ」

「なるほどくけどそれにしても楽しそうに東寺から出てきてたよね? まるでデートしてるカップルが如く」

「デ、デート!? 違うから! これもおかんが時間掛かりそうだから、少し観光するか聞いて案内してただけで!!」

「並み居る男子のお誘いを断ってきた燕様がお誘いをだと!」

「ああ〜! もう堪忍して〜舞ちやくん!!」

「ニヤニヤ(燕をからかう機会なんてそうそう無いからね〜)」

向こうと違い、こちらは和やかとはいかない現状。うう〜まさかここで舞ちゃんたちに会うなんて……しかもここぞとばかりにイジってくるし……この鬱憤は海人君との試合で晴らさせてもらおう! 彼も無関係ではないから良いよね?

「ねえ? そろそろ向こう止めなくていいのかな?」

友達からの質問責めに軽く涙目になっている燕さんに助け船を出そうと言ってみる

と——「そうですね、そろそろ止めに入りますか」と返事が返ってきた。

「舞ちゃん。程ほどにしとかなないと、2人にも悪いよ！ 私たちもそろそろ帰ろう？」

「ええ、むしろここかr——『舞ちゃん』……むう、はあーい」

「……………（助かった…………）」

「あつ、燕！ 続きは学校で聞かせてもらうからね、じゃつ！」

「……………ええ、!?」

「それじゃあ私も失礼します」

「うん、じゃあね！ 葵君にもよろしく言つといて下さい」

「はい。ではまた」

2人を見送り、疲れ顔の燕さんの下へ行く。恐らく彼女の苦難はまだ続くのだろうが、俺がどうこう出来るわけじゃないからなあ、

「もう助けに入るのが遅いよー!! しかもそつちはそつちで和やかムード出してると……」

「あはは……前に京都来た時の相手の妹さんだった」

「……………紅葉ちゃんのとて事は前回の相手、葵君だったんだ。私も何度か試合した事あるよ」

「そうなんだ——因みに結果は？」

「私の全勝V!」

笑顔でVの字を作る燕さんを見て、試合への期待が高まる……良い試合が出来るそう
だ。

その後は引き続き燕さんの案内で、西本願寺、東本願寺と見て回り、伏見稲荷大社へ
行こうとしたところで、ミサゴさんから連絡が入り合流する事となった。

九話 燕戦開始!

「ごめんね! 急に変更になっちゃって」

「いえ! こちらこそお忙しい中ありがとうございます」

ミサゴさんの運転する車に乗り込み合流した後、彼女たちが修行場として借りている場所へ案内される。

「へえ、結構広いですね、しかも色々な武器も飾ってあって凄いや!」

修行場に入ると、その広さと、壁にかけられた武器の数々に目がいった。

「仕事柄、一通りの武器は扱えるように訓練してるからね!」

やはりその辺は他の家でもそうなんだなあ、と思う。

「ウチですよ! 俺は刀をメインにしていますけど、他の武器も一応訓練していますし」

「あら、そうなのね。大成さんが引き分けたって言ってたから、てつきり刀使いとばかり
…」

「一番得意なのは事実ですよ——ってもう伝わってるし!? だけど、正直俺は負けだっ
たと思ってますけどね」

「あはっ、大成さんの読み通りの発言ね」

「えっ?」

「大成さんが『引き分けと聞いて、彼ならこう言うだろう』と言われてたから」

あはは……と乾いた笑いとともに、俺もまだまだだなぁと思うっていると、制服からラフな格好に着替えた燕さんがやってきた。

「えつとくその格好で試合するのかな?」

「え? そうだけど〜」

ピンクのノースリーブにベージュのショートパンツの燕さん……普通に似合っていて、かわいいと思ってしまった。

「うちは別に道場開いてる訳でもないし、格好にこだわりは無いわよ?」

「それ言ったら、海人君だってTシャツに7分丈のカーゴパンツじゃない」

「……………」

言われてみればそうだな……ただ……

「んっ?」

ちよつと露出多めなその格好は、健全な男子にはちよつと目のやり場に困るというか、直視しづらい……まさかそれも狙いだということのか?

「……………ああくニヤリ」

何だろう? 一瞬、燕さんが笑ったように見えたのは気のせいだろうか……

「それじゃあ、早速試合開始といきましょうか。武器ありで、人体の急所を狙った攻撃は禁止ね！ 危険と判断した段階で止めに入るから。あつ、勿論海人君も場内の武器も使つて構わないからね」

「はい、ありがとうございます」

「それじゃ『ねえねえ、海人君』……？」

「さつきからチラチラとこつちを見て、私のどこを見てるのかなあ」

「い、いや別に変なところは見てないからね!？」

「変なところ……海人君のエツチ」

「なあつ!？」

自身の胸を隠すような仕草で燕さんが爆弾発言をぶつ放す。

「はあ……まあ、いいわ。試合開始!」

まさかのここで試合開始言います!？ 出だしを完全に崩された俺は拳のフェイントからの、胴への蹴りによる一撃をまともに受けてしまう事となった……

十話 海人 v s 燕

「イタタア〜」

いきなり良いのを一撃もらってしまった……てかアレは卑怯だ！ 憤りを覚えながらも、次の攻撃に備えて構える。

「先制打はこっちがもらつたよ〜ん」

満面の笑顔でこちらを見ながら、手近にあった薙刀を手に取り、構えて向かい合う。

「……燕さんみたいなかわいい女の子にあんな事されたら、男はみんな動揺するからあ
!!!」

「——ふえっ? 『スキあり!』——キャン?!」

俺の叫びに頬を赤く染め、動揺した燕さんの懐に〈縮地〉で入り込み、当て身で吹き飛ばす。それと同時に薙刀を奪い取り、そのまま追い撃ちをかける。

「——ちよー——速っ!?!……このお!!」

運良く近くにあった刀を取り、海人の攻撃を捌く燕。数手の攻防の後、再び向かい合う二人。

「いきなりあんな大声で叫ばれたらびっくりするじゃない!! (しかも『燕さんみたいなか

わいい女の子』とか……!!)」

「……さっきのお返しだよ！　まさか、あんなにすんなり決まるとは思わなかったけどね」

「むう乙女の純情を弄んだ罪は大きいんだからね!!」

「——それはお互い様!!」

言葉がぶつかり合った後、再びお互いの武器が交差し合う。

そんな二人を見ながら……「うふふ……二人ともまだまだ若いわねえ」と一人つぶやくミサゴさんがいた。

使い慣れない薙刀を使う海人であったが、刀を使う燕も基本的な型は出来ているが、自分のように本格的に学んではいけないのが分かると、攻勢に出ることにする。

「……………（ここに来る途中に考えた技だけど、試してみるか!）」

一旦距離を取り、腰を引き、薙刀を腰に抱える……

何か技がくるであろう事を察し、構える燕であったが……

「——我流突閃・紫電連突!! ※」

「——つぐー……捌き……きれな……ぐああー!!」

「はあはあ……これ、突く方も結構キツイわ!」

海人の技が決まり、突き飛ばされる燕であったが、すぐに立ち上がり構える。

「いたたつ……ちよつと、海人君激しすぎるよ〜」

「ははつ。さすがに今のは俺も疲れたよ……」

「もう！ お氣にのシャツがボロボロだよお〜女の子には優しくしないと駄目なんだからね!!」

「それはすみませんでした……試合においては男女は意識しないようにしてるので。むしろ女性だからと手を抜くのは相手に失礼だと思ってるから!」

「む〜そう言われると、何も言い返せないじゃない!」

怒る燕を横目に見ながら、海人は刀に手を掛ける。

「——つつ!! 急に雰囲気が変わったね……ここからが本氣つてわけ?」

「さっきまでも本氣だったよ。ただこいつは自分の一番の相棒であり、自信でもあるからね!」

「そっか〜」

さすがに素手で迎え撃つには分が悪いとみたのか、燕も先程まで使っていた刀を掴み、対峙する。

「……いくよ」

「うん……（一撃目を何とか防いで、二撃目に賭ける!）」

二人の刀が交差する……

「よし！ 防いだ！」

一撃目を防ぎ、蹴りを海人に放った燕であったが、海人はそれを回転しながらかわし、燕の背中を刀の鞘で切りつける。

「——かはっ！」

「……我流二閃・双牙」

「それまで！——勝者、布仏海人!!」

※我流突閃・紫電連突

海人が自身の我流突閃・星突と、黛流・紫電三突から考えた技。

高速の突きをひたすら突いて！ 突いて！ 突きまくる!! 技でございませす。

十一話 三人目は～君に決めた☆

「——よっと」

意識を失い、倒れそうになる燕をミサゴが支える。

「あくあ、燕ちゃんの公式戦無敗記録が止まっちゃったわね」

「——あつ！ 燕さんは大丈夫ですか!? その、手加減出来なくて……」

「大丈夫よ。気を失っているだけだから……とりあえず、燕ちゃんをソファアに寝かせましよう」

燕をソファアへ寝かせて、ミサゴはこの後の予定を海人に聞いてくる。

「どうする？ 大成さんところみたく、私とも一戦やる？」

「……大変魅力的なお誘いなんです、体力的に無理そうです……またの機会にお願いします！」

「あら、残念……じゃあ、今日はこれまでね。この辺に泊まるの？」

「いえ、次の場所まで移動して泊まる予定です」

「そう。なら、ちよっと待ってて！ 駅まで送っていくわ」

「いえ、そこまで気を使っていたかなくても——『いいからいいから!』」

ミサゴの勢いにおされ、海人は送ってもらおう事となり、戸締まりや燕へのメモ書きなどをミサゴが残している間に、海人は次の相手のところに電話するのだった。

数回のコール音の後、向こうと電話が繋がる。

「京、すまんが今、手が放せんから電話出てくれ!」

「分かった」

父に頼まれ、私は読んでいた小説を閉じて、電話へと向かう。

「はい。椎名ですが」

「こんにちは! 布仏海人と申します。武者修行の件でお電話させて頂きました!」

「武者修行……ああ、話しは聞いています。いつ頃来られる予定ですか?」

「明日の日中か、出来れば朝一でお願ひしたいのですが」

「(明日は金曜集会の日)……日中だと無理です。朝一だと何時頃から来れますか?」

「今日の内に、近くまで行って泊まる予定なので、ご希望の時間で大丈夫です!」

「……では、七時に道場へお越し下さい。よろしいですか?」

「はい! よろしくお願ひします!」

「……では」

よし！ これで次もOKだな!! 明日は朝一だから、今日は早めに寝ておこうかな
「あら、実家に結果報告でもしてたの?」

車のキーを指でクルクル回しながら、ミサゴさんがやってくる。

「いえ、次の対戦相手のところへ連絡をしていました(そういえば実家の方にも中間報告あげないとなく刀奈や本音辺りがそろそろ連絡してくるかも……)」

「そう。じゃあ、行きましようか」

「はい、お願いします!」

ミサゴさんの車に乗り込み駅へと向かう。燕さんは意識が戻らず、お別れが出来なかつたけど、良い試合が出来たと思う。(途中、ちよつとふざけあつた場面もあつたけどね……)

一方その頃、とあるお宅にて。

「ただいま」

「おかえり紅葉。今日は早かつたな?」

「うん。舞ちゃんが用事があるらしく、早めに切り上げたんだ——あつ! 面白いえば今日、布仏海人さんに会つたよ!」

「……布仏海人だど!! 何故ヤツがここにいる!?!」

突然の妹の発言に驚く葵。

「武者修行の旅の途中で、燕ちゃんのところに來てるらしいよ〜」

「武者修行……何故俺のところに来ない!! 布仏海人おとおお!!?!」

「さあ? とりあえず、兄さんにもよろしく言つといて〜つて言われたよ」

「………ということは、海人殿は今、燕殿のところに居るのだな!?!」

「多分、そうだと思うけど」

何を考えたのか、葵はそう妹に問いただし、確認するとともに、何も言わず玄関へと向かい、外へと駆けていった。

十二話 燕殿〜!!

誰かが私を読んでいる……そんな気がして、ゆっくりと意識が覚醒していく……

「……は……修行場だよな? あれ? 私何してたっけ?」

目覚める前の事を思いだそうとした時だった……入口の扉が叩かれ、私を呼ぶ声が聞こえる。

「燕殿く居らぬでござるか! 燕殿く!!」

この声は葵君かな? とりあえず出た方が良いかなつとソファから立ち上がったところで、おかんからの書き置きを見つける。

【書き置き】

「燕ちゃん気が絶しちやつたので、ソファに寝かせて、海人君を馱まで送ってきます。帰りにまた拾いに来るので、それまで反省会でもしてて〜 ミサゴより」

そうだ! 私海人君と試合して負けちやつたんだ……「燕殿く!!」——あつ!?——そうだ、葵君待たせてた。

葵君を出迎えに入口へと向かう。今もなお扉を叩きながら、私を呼ぶ葵君……正直、ご近所迷惑だよ……

「今開けるから、ちよつと待つて!!」

「——ぬっ!？」

軽く怒気を含んだ私の声に、葵君が黙る。

「何かな? あとご近所迷惑だから静かにしてくれる?」

「あくそれは失礼した……海人殿、布仏海人が来ていると妹から聞いて急いで来たのだが……」

「海人君ならおかんが駅まで送つて行つたよ……時間的に駅に着いたか、出発したくらいじゃないかな?」

「くっ……今からじゃ走つて行つても間に合わぬか……」

「……何なら海人君に電話してみようか? 連絡先交換したし」

「——頼む!!」

葵君から発せられる謎のプレッシャーに若干引きながらも、私は海人君へと電話を掛けた。

「送つて下さつてありがとうございます!!」

「いえいえ、また近くに来た時は声掛けてね。今度は私も相手してあげるから☆」

「その時は是非!!」

ミサゴに感謝の意を伝え、次なる修行場へと向かおうとしたところで海人の携帯が鳴る。

「ん？ 燕さんからだ……目が覚めたのかな？」

「あつ海——『布仏海人!!!』 何故、俺のところには来ない!!』——ああ、ちよつと!!」

電話が繋がったのを確認したところで葵は燕の携帯を奪い取り叫び出す。

海人が燕からだと思ひ、出た電話から聞こえてきたのは、男の怒号であった。

突然の大声に驚き、顔をしかめる海人であったが、耳から離しても聞こえるその大声に、ふと懐かしさを覚える。

「この声……葵君かしら？」

「葵君?.....!?!」

ミサゴのつぶやきに、海人の脳裏に一人の少年武道家の姿が思い浮かぶ。

「葵……近衛葵君？」

「そうでござる!! 武者修行に来たのなら、何故俺のところへ寄ってくれなかったのだああああ!!」

「ああ……」と言葉に詰まる海人。葵の事を忘れていた訳ではないが、まさかリスミアップされた中にいなかったからとは言えず、返答に困っていると……

スパアーン!!

と心地よい音が響き、燕が電話口に出る。

「ごめんね海人君！ ご近所迷惑なバカは肅正しといたから〜」

「あ、ああ〜ありがとうございます？ で良いのかな？」

地に伏せた葵は無視して、取り返した携帯で会話を続ける燕。

「うんうん！ 葵君はこつちでなんとかしとくから、次の相手も頑張つてね☆あと、次の

試合は私が勝たせてもらうから!!」

「ふふ、俺だつて負けるつもりは無いよ！ じゃあ、そろそろ時間だから……」

そして互いに別れの挨拶をして、通話は切られた。

「じゃつ、私も戻るわね」

「はい。送っていただきありがとうございます!」

ミサゴとも分かれ、海人は次なる修行の場へと旅立った……

海人が旅立った頃、松永家の修行場では……

「イタタ……いきなり後ろからとは卑怯でござるよ、燕殿」

「勝手に私の携帯奪つた上に、ご近所迷惑考えないおバカさんに与える優しさがあると

でござる」

「それはそうでごさるが……いや、すまなか……つつ!?」

落ち着いて起き上がり、燕に謝罪しようと燕の方を向いた葵であったが、目の前の光景に言葉を詰まらせ、顔を赤らめる。

燕の普段とは違うラフな格好な上に、海人との試合でボロボロになっていた服からチラチラと見える燕の健康的な素肌を目を奪われてしまう。

「……ん?」と葵の言動に疑問を抱き、彼の視線の先を見て、燕も自身の格好に気づく。
「ジ、ジロジロ見るなああああ!!!」

スパアーン!!!

「——ひでぶう!?!」

燕の本気のビンタが決まり、本日二度目の地に伏せた葵であった……

十三話 ツナギ

ミサゴさんと別れ、次の椎名さんのところへ向かう新幹線を待つ間に、中間報告をしようとして父さんに電話を掛ける………数コールしたところで電話が繋がる。

「あつ、海人君？ 調子はどう!？」

「えっ？ 刀奈?！」

慌てて画面を確認するが、番号は父さんので間違いない。

「何故に刀奈が?！」

「ん？ た・ま・た・ま・ま・おじさまに海人君の武者修行について殴り込……みんなで話し合ってたところだったのよ」

「いや、殴り込みって何してるのさ!!」

「何やら不穏な感じを受話口から感じしていると、簪や本音の俺を呼ぶ声も聞こえてくる。みんないるみたいだな」

「それで？ 今どこにいるの?！」

「普通に流されたが……まあいいか。」

「今は京都駅だね。今から次の目的地付近のホテルに移動して、明日の朝一で椎名流弓

術道場にアポとってる」

「そう……じゃあ、明日はその後、そのまま川神院に向かいなさい。連絡はこちらからしておいてあげるから」

「え？ その後、神奈川付近には戻るけど、地元の有力量のところを回る予定じゃ……」
聞いていた話しと違う。話しでは現武道四天王の鉄乙女さんや九鬼揚羽さんなど数ヶ所回って、最後に川神院だったはず。

「……とりあえず父さんに変わってもらえる？」

「……………分かったわ」

長い沈黙の後、やっと父さんに代わって貰えた。

「海人か？ 俺だ」

「父さん、刀奈の話しだけど……良いの？ 元々西日本の有力量（原作でいう西方十勇士の皆さん）も予定してたのキャンセルしたのに更に——『海人！』——えっ、何!？」

「……察しろ」

「あつ……はい」

また、刀奈達が父さんのところにクレームで押し掛けた……というか現在進行形なのだろう。

「それで、もちろん勝ってるのだろうか？」

「一応、負けはないよ。だけど劍聖さんには、ほぼ負けに近い引き分けだったけどね……」

「そうか——つて、本音?! 勝手に携帯を奪おうとするな!!」

「わたしもおにいちゃんとお話しし〜た〜い〜い〜い〜い〜!!」

「はあ……とりあえず代わるな」

今度は本音が暴れているようだ。ストップがかからなかったところをみると虚姉さんはいないようだ。生徒会かな？

「やつほ〜い☆おにいちゃん! そういうわけだから早く帰ってきてね〜みんな待ってるから!!——あつ、刀奈様から伝言。川神院に移動する前にまた連絡してだつて☆」

「了解だよ。ああ、新幹線来たみたいだから切るな。簪にもよろしく言つといてくれ」

「了解☆じゃあね〜『ちよ!! 私まだ海兄と話し——』……………」

無常にも通話は途切れ、海人は次なる目的地へ……頑張れ簪!・ドンマイ簪!

お気に入り100人突破を感謝して☆
【真剣で筋肉に恋しなさい!!】

これは私こと近衛紅葉と愛しのガクト様の出会いと愛の日々をたんたんつつつたものです。過度な期待はしないで下さい。

【真剣で筋肉に恋しなさい!!】

【近衛家】……古くは鎌倉時代から続く古武術の名家で、今は私の父が当主兼近衛流道場の師範を勤めています。

父と兄の影響もあり、私も幼い頃から近衛流の修行をしていましたが、門下生に女子が私一人しかいなかった事もあり、中学にあがる時に道場に通うのを辞めてしまいました……その思春期特有の悩みと言いますか……近衛流にも投げ技や組み技もありまして……

勿論、鍛錬も辞めたわけではないですよ？ 兄の自主練に付き合ったり、燕ちゃんと仲良くなつてからは、燕ちゃんのところの訓練所で一緒に鍛錬したりもしています。

それでも中学二年くらいまでは兄より私の方が強かったんです！

さて……私の紹介はこれくらいにして「誰に？」……舞ちゃん？ それは聞かない
お約束ですよ★

運命の出会いは突然でした……舞ちゃんと一緒に軽くランチをと訪れた喫茶店でその人は現れた。

私たちが兄の将来について心配していたさなか、団体のお客さんが入って来る。騒がしくもおのおの行動する中、私の視線はカウンターの前でマスターに筋肉自慢をする一人の男の子に釘付けになってしまった。

「……イイ」

「……はっ？」

「……あの筋肉……イイワ★」

「あの……紅葉く大丈夫？」

まるで獲物を見つけた鷹の如く、彼を見つめる私……その視線に気づいたのか一人の少女がこちらへとやってくる。

「こんにちわ〜お二人でティータイムですか？（うん！ 間近で見ても美少女二人☆これはお近づきにならねば！）」

「え!? えっと、はい」

突然声を掛けられた事に驚く舞ちゃんをスルーして、私は彼への視線を離さない。

「えっと……何かこつちの方をジツと見ていた……というか今も見てるのが気になって声を掛けたんだけど……（この視線の先に居るのは、ガクトとモロか?）」

「も……紅葉!」

さすがに視線を外さず、反応を示さない私をマズいと思ったのか舞ちゃんが肩に手を置いて、呼び掛けてくる。

仕方なく視線を目の前の少女に向けると、意外にも知っている顔だった。

「川神……百代さん?」

「おっ? 私的事を知ってるみたいだな」「えっ? 川神百代ってあの武神の!?!」

【川神百代】……生まれ持った天武の才から若くして武神と恐れられ、次期武道四天王入りも間違いなしといわれる逸材で、その見た目もあつてか武術を嗜む者たちの憧れの存在でもある。

しかし、今の私にとってはそれも関係なく、もつと優先すべき事があるのだ!!

「すみません、川神さん……私少しやる事が……舞ちゃん、悪いけど川神さんのお相手よろしく」

そう言つて私は席を立ち、マスターに筋肉をスルーされ、カウンターに寂しく座る彼の下へ歩き出す。

席を立ち、離れていく紅葉を見ながら、目の前にキョトンと立ち尽くす武神こと川神百代さんをどうしようかと悩む。

先程の言動から紅葉が何をしようとしていたのかは、おおよそ予想は付いている。紅葉のアレを知っているから……とりあえず頼まれた事を遂行しよう。

——とかむしろ！ 武神の川神さんとか興味アリアリだよ!! ——そんな私はノリノリで川神さんに声を掛けたのだった。

一度、こちらの方を見た川神さんでしたが、ノリノリで話しかけてきた舞ちゃんに気を良くしたのか、二人で意気投合したようで、楽しそうに話している。

一方、私は彼のタンクトップの隙間から見える背筋と、上腕二頭筋に目を奪われながら、いざ目の前に来て、あと一步を踏み出せないでいる。

マスターがチラチラとこちらを見てくる……私の心境はそれどころではなかったが、彼の隣に座る少年も私に気づいたのかチラチラと私を見てきた。そしてそれを不審に思ったのか、とうとう彼もこちらへ振り返ってしまい、私と目が合ってしまった

.....

見つめ合う二人……そして時は動き出す!!

私の覚悟があと少しで出来るかというところで、後ろに立つ私に気づいた彼がこちらを振り返り……目が合ってしまった……

「……………」

「……………」

しばらくの沈黙の後、動けないでいる私に彼は話しかけてきた。

「……………美しい……………」

「ふえっ!?!」

「お姉さん……………このような場所に立ちつくされてどうされました？ よろしければそちらの席で私とご一緒にティータイムでも如何ですか？」

ガクトがいつもの決め顔と決めポーズでそう言うのを横で見ていた三人（モロ、クリス、京）は……

「またガクトがやってるよ（あつ、これ一昨日貸したアニメのセリフまんまだ）」

「ガクトも懲りない奴だな（あのポーキングはどうにかならんのか）」
「しよ〜もない（また連敗記録更新かな〜）」

……と軽くデイスっていたものの……

「は、はい！ 喜んで☆」

……紅葉が満面の笑みで、ガクトに返すのを見て……

「「なん……だと？」」

いや、ガクト君まで驚いちや駄目でしょう!? 他の三人はともかく!

——はっ!? いかん。普通につつこんでしまった。

「モ、モモモ、モロロ!! 俺の顔を殴ってみてくれ!」

「ガクト馬鹿なの!? そんな事より早く彼女の相手をしてあげなよ! せっかくなんだ

からホラホラ!!」

モロの両肩に手を乗せ、慌てるガクトを突き放し、ガクトの背中を押すモロ……せっかくの親友が掴んだチャンス無くすまいと必死になる。

「クリスウ〜私は今、奇跡の目撃者になつてるよお〜」

「いや、京。さすがにそれは言い過ぎではないのか? ——つて!? 京、泣いているのか!?」

大切なファミリーの一員が成し遂げた奇跡に感動の涙を流す京。口ではデイスリな

がらも心の中では本当に喜んでいるのである。

「あ、あの……座られないのですか？」

「ほら！ ガクト！」

モロに背中を押され、再び紅葉の前に立つガクト。顔は赤面し、先程決め顔を決めていた姿はもうそこにはない。

「あ、あのあの……そ、そうですね！ 取りあえず座りましょう!!」

「はい！」

ガクトの緊張ぶりに、逆に落ち着きを取り戻した紅葉は再び獲物を見つけた鷹の如く——いや、既に捉えた獲物（ガクト）へのマシンガントークを始めるのであった。

一方その頃、周りはどうと……

【モロ、クリス、京↓】

「モロ、お疲れだったな」

「はあくなんとかね——って!!? どうして京が泣いてるの?!?」

「う、う……モロおつかれえ〜」

「どうやらガクトのアレに感動して涙しているらしい」

「……あはは」

「ううゝ私も負けてられない！ 大和のところ行ってくる！」

【大和、↓京】

「……………（たまにはこうして一人、皆を眺めながらコーヒー飲むのも良いな）」

「やあくまあくとお〜！ 私を慰めてえ〜」

「だあああああ！ いきなり抱きついてくるなあ〜!!」

「……………クンカクンカ！（ああゝ大和の匂い……………落ち着くの〜）」

【海人、まゆっち、松風】

「……………（モモ先輩が抜けた今がチャンス！）」

「まゆっちー！ モモ先輩抜けた今がチャンスだ！ 今こそ、書きに書き溜めた《海人さん

質問集100》の出番だぜい☆」

「え？ 何ソレ!？」

その後しばらく海人はまゆっち&松風のマシンガンクエスチョンの回答に追いやられる事となる。

【百代、舞】

「（紅葉は、どうやら上手くいったみたいね）……………ところで、モモちゃんはやっぱり海人君狙いなのか？ 入ってきて速攻突撃かましてたし」

「そ、それは……………」

親友のアタック成功にホッと胸を撫で下ろしながら、いつの間にかあだ名で呼び合う仲になった百代に、ふとした疑問を投げかける舞。

「あ、顔が赤くなつた！ 乙女してるモモちゃんカクワイイ☆」

「だあああああ！ なら舞の方はどうなんだ!?——ま、まさか海人狙いだなんて言い出すんじゃないだろうな!?!」

「え!?! ち、違うよ〜〜! 確かに海人君は魅力的な男子だとは思うけど、私は他に好きな人いるし……片想いだけど」

「その辺詳しく!!」
「こちらは変わらず盛り上がっている様子である。」

カランカランとベルが鳴り、新たな来客を告げる。

「川神一子、遅ればせながら見参!」

「あと私もいます」

「おうワンコやつと来たか! あと、チェルシーさん※もこんにちは〜〜で、試合結果はどうだったんだ!?!」

「僅差だったけど、アタシの勝ち! 褒めて褒めて、おねえさま〜」

そういうやいなや、百代の下へダイブし頭を差し出す一子。百代も一子を受け止め、

ワシヤワシヤと髪を撫でながら、いもうとの健闘をたたえる。

そんな和やかな空気に包まれる一方……

「おお、メイドのお姉さん！」

ガクトが鼻の下を伸ばし、言ったこの一言で空気に亀裂が入る事となる……

「GA・KU・TO・様？　今は私とのお話し中ですよね？」

ハイライトの消えた目でガクトの背中を見つめる紅葉の視線に、背中が凍り付くのを感じたガクトは慌てて紅葉の方に向き直る。

はたして二人の恋路は上手くいくのでしょうか？

尚、この時、ガクトに鋭い視線を向けていた人がもう一人いたのは言わずもがなで
しょうか？　ふふふ。

※チエルシー

元のISの方の登場キャラで、本来はモブキャラですが、私の作品では重要なポジションを務めています。詳しく知りたい方は元の裏ルートをご参照下さい。

簡潔に言えば、仏のヒロインです☆

十四話 京戦開始!

「はあ……」

深い溜め息をつく。ホテルのベットに横になりながら、さすがに刀奈達もちよつとやり過ぎかなと思う今日この頃。まあ夏休みが増えるのは嬉しいんだけどね!

明日は朝から椎名流弓術道場へ。弓使いとの試合は初めてだけど……あれ? 弓使いとの試合ってどんな形になるんだろう? いきなり至近距離から開始なんて無いだろうし、勝敗基準も……

「ふわあ」

欠伸とともに眠気が襲ってくる。まあその辺は最初に話し合うだろうからその時で良いか……今は寝よう……

「ヤバイ……」

私、布仏海人ただいま全力疾走中でございます。一度起きはしたものの、ホテルの朝食バイキングの時間までベットでゴロゴロしてたら……はい。二度寝です。

「くそお朝飯食べれなかったよ〜」

空腹を主張してくるお腹を叩きながら、走る……走る。

「ハア……ハア……着いた……」

6時58分。なんとか約束の7時00分までには着くことができた。呼吸を整え、呼び鈴を押そうとしたところで、玄関が開き一人の男性が現れる。

「ん？ 布仏海人君かな？」

「はい！ 布仏海人と申します。本日はよろしくお願ひします！」

「うむ。早速だが、道場へ案内しよう」

椎名さんの後続き、中へと入る。

「息が荒いようだが大丈夫かね？」

「すみません。直前まで走って来ていたので……」

「そうか。遅刻なぞしようものなら、門前払いしてやろうかと思つたが……危なかつたな？」

ニヤリと笑う椎名さんの言葉に、冷や汗を感じながら、なんとか笑い返す。

少し歩いたところでの的のある練習場へと入る。中に入ると、一人の少女が弓を構え、先的的を見つめ……放つ。

矢は見事に的の中心円を射抜く。視線を少女へと戻し、射抜いたままの姿を見ると

……

「きれいだ……」

自然と言葉が出ていた。それほどに的を射抜いた少女の立ち姿は見惚れる程に美しく、様になっていた。

「どうだ？ なかなかのものだろう？」

「はい。私は弓は嗜む程度にしか習ってはいませんが、それでもレベルの違いがはっきりと分かります」

「だろ!? 今はまだ俺が【天下五弓】を名乗っちゃいるが……正直、既に娘の方が上だと俺は思っている」

そんな話しをしていると、少女が弓を下げ、こちらへと歩いてくる。

「紹介しよう。娘の京だ」

「……椎名京です」

「布仏海人です。本日はよろしくお願いします」

「……始めましょう」

京さんが椎名さんへと目で合図を送り、試合を始めるよう急かす。

「ああ、試合形式だが、ウチのやり方で良かったのかな？」

「はい。構いません」

確認した試合形式は至って簡単なものだった。練習場の両端からスタートし、京さんに一太刀入れればこちらの勝ちで、それまでにクリーンヒットと判定される弓の一撃を貰うと負けというものだ。

「両者準備は良いかな？」

「はい！」

「では——始め！」

最終話 海人 v s 京～そして川神へ～

試合が始まった……開始と同時に鋭い視線が自分を貫いたのが分かる。軽く体を揺さぶってみるが、弓の射線が体から外れる事は無い。

「下手に動いても駄目そうだ……ならば!!」

意を決すると、両手に木刀を持ち、駆ける。

この時、私は如何に早く試合を終わらせようとしか考えていなかった……だけど負けるつもりも無い。だから初っ端から全力全開。早くみんなに会いに行きたい想いで、私の気持ちは凄く集中したものとなり、一撃必中の心構えだ。

彼は軽く揺さぶりを掛けてきたけど、諦めたのか一気にこちらへと駆けてくる。

「……武弓追旋」

簡単に言えば乱れ撃ちだ。(勿論全力全開)だけど幾つか羽に細工がしてあり、外れたと思った矢が角度を変えて飛んでくるもので、私の得意技の一つだ。

「……嘘ッ?」

これで決めるつもりだった……だけど全ていなし、防がれた。

「……ツツ!？」

一瞬の油断……それが彼との距離を更に縮める事となる。

「——爆矢!」

この距離だと自分にも被害が及ぶが、そんな事言っていられない。ここで止めないと負けると思った私は躊躇せず、その一撃を放った。

目前に大量の矢が飛んでくる——つて! いきなりぶつ飛ばし過ぎではないですか、京さん?

「うわっ!？」

突然、外れたと思っていた矢が顔面目掛けて飛んできた……なるほど……いくつか細工してあるわけだ。

「だが——突き進む!!」

途中、矢が切れたのか、一瞬の隙が生まれる……勝機! 一気に距離をつめようとする。

「ん? やけに矢尻がデカ——ヤバッ!!」

気づいた時には既に射程範囲内で回避は無理と判断。

「——ンナロオ!!」

【爆矢】が決まり、彼が吹き飛ぶ姿を想像した私だったが、視界に見えたのは抜刀の構えから回るように爆発の衝撃を受け流し、そのままの勢いでもう一本の木刀を私の首の前で寸止めた彼の姿だった。

「勝負有り！ 勝者、布仏海人！」

勝って大和に誉めて貰おうと思っていたのに……結果は負けちゃった……大和に慰めて貰おうと★

寸止めの形で構えたまま、勝敗を聞く。

「僕の勝ちですね」と言おうとしたところで……

クウッツギルギルギル

「……………」

「……………」

カツコ良く決めるところが、急に鳴った腹の虫のせいで台無しになる……

「プツ……ククク……」

京さんが口を手で押さえ、必死に笑うのを我慢しようとしている……が我慢し切れて

ない！

「そういえば朝走ってきてギリギリだったなくもしかして朝飯食えてなかった？」

椎名さんの言葉にコクリと下を向いたまま頷く事しか出来ない。恐らく今の俺の顔は真つ赤になっている事だろう。

「ああ、大したものは出せないが……京、彼の分も朝食を用意してあげなさい」

「……わ、分かった——プククツ」

急な話しだったが、朝食を一緒にさせてもらえるようになった。せつかく試合に勝つたのに、勝った気がしないのは気のせいだろうか……？

頂いた朝食は、白米に豆腐とゴボウの味噌汁、ゴボウと牛肉の炒め物、玉子焼きに唐揚げとお弁当になりそうな品々だった。

「……作ったお弁当の余り物とはいえ、私の料理が食べられるのは光栄」

「(やつぱりお弁当だったんだ)……椎名さんへのお弁当？」

「違う」

「これは愛しのダーリンへの愛・妻・弁・当！」

「……ここでまさかの愛妻弁当宣言！ そつかあ、京さんにはステキな彼氏がいるんだね

☆

「良いなあ、味も凄く美味しいし、京さんの彼氏さんが羨ましいなあ」

「……………」

突然黙り込む椎名さん——あつ！ 娘のダーリン発言に親として気になってるんだろ？——とこの時の俺は思っていた。勿論それも有ったのだからうけれども……《ヒント：赤い液体》

「彼氏だなんて——!? けどそれも近い未来には……」

そんなこんなで朝食を頂いたあと、同じく川神に行くとの事で、駅まで一緒に行くことになった。その道中、京さんの惚気話？ を聞きながら、彼……大和君というらしい、との事で同じ男としてアドバイス出来そうなところはアドバイスしてあげた。

あと、京さんから「私は親しい人たちと以外は距離は置きがちな……」と言われたが、俺はあの腹の虫のインパクトと、何か話しやすい雰囲気があったとの事で、今こうして話せているらしい。そう考えたら、あの恥ずかしかった一幕も、まあ良かったかなと少しだけ思えた。

「あつ、ゴメン。少しだけ電話掛けてくるよ」

「分かった」

川神院に向かう前に電話するよう刀奈たちに言われていたのを忘れていた。刀奈の

番号を呼び出し掛ける。

「海人君!？」

まさかのワンコール目で繋がった事に驚きながら、これから川神院に向かう電車に乗る事を伝える。

「そう。じゃあ、お疲れパーティーをみんなまで準備してるから早く帰ってきてね☆」「お疲れパーティーって……分かったよ。じゃあ——『海人さん。電車来たよ——』ああ、ありがとう。すぐ行くよ！」

「……海人君……ダレ? 今ノ女ノ声………」

「えっ……!？」

明るい声が一転して、どす黒い声が受話口から聞こえてくる。

「あ、えつと……とりあえず電車来たからまた後で!!」

これは逃げたんじゃない! 急ぎだったから仕方なく切ったんだ!!

「……額に汗かいてるけど大丈夫?」

「ああうん。だいじよ——『ヴウーンヴウーン——』」

携帯のバイブが鳴り、恐る恐る画面を開くと、刀奈からのメールだった。

「うわっ、かわいい子。もしかして海人さんの彼女さんですか?」

「……幼馴染み」

「……メール見ないんですか？」

「何故だろう？ 決定ボタンが押せないんだ」

「もしかして私……余計な事を？」

「いや、別に京さんは何も悪くないさ」

意を決して、メールを開く。

メール

「シヨウサイ（#^ー^#）」

深い溜め息とともに、全身の力が抜ける。

川神に着くまで「海人さんも大変なんですね」と京さんに慰められたのだった。

筋肉エンド 前編

今日は……

ガクト様との……

初デートオオオオオオ!!!

今日のデートが上手くいったら私……ガクト様に……!!

「はい。そろそろ戻ってきなさい!」

バチン! と良い音を立てて後頭部を叩かれる。

「痛いよ〜舞ちゃん」

「妄想世界飛び過ぎ……はあ……普段はお淑やかな大和撫子なのに、この姿をクラスの男子が見たらなんて言うやら」

「他の人の前では気をつけてるよ」

「なら良いんだけどね」

今日は待ちに待ったガクト様との初デートの日です。あれからお互いにチヨコチヨコと連絡し合い、先日なんとガクト様からデートに誘って貰えたのです!

ガクト様が普段使っているプロレス技についての話しになった時に、少し熱くなって

しまつて……プロレスってボクシングとかと一緒に上半身裸な人がほとんどだから、その……筋肉質な体がね……★

それで、一度試合を生で見に行つてみたいなくな事を話してたらガクト様が——「な、なら、一緒に見に行つてみませんか!？」つて、すごく緊張した声で誘つてくれて——んう
~~~~~  
!!!!

再び自分の体を抱きしめ、悶え始めた紅葉を呆れた瞳で見つめながら、私は紅葉の書いたデートの計画表を見る。

「しかし、まあ、初デートがプロレス観戦つてどうなのよ?」

「私とガクト様ならありなんだよ!」

「……………もう、好きにしなさい」

私は素直に諦める事にした。

「それじゃあ、行つてくるね!」

「はいはい。一応成功を祈つておいてあげるわ」

幸せそうな顔で私の親友は走り去っていった……場所はどうかあれ、デートかあく私も葵君と……



「舞殿、舞殿」

「——ツツ、ウエツ!?!」

突如後ろから掛けられた声に驚いて振り返ると……

「え、えっ?——葵君!?!」

「すまぬ! 驚かせてしまったようだな」

まさかの葵君登場に、私の心臓はドクンと跳ね上がる。

「舞殿……」

肩に手を置かれ、真っ直ぐな、真剣な瞳で私を見つめてくる葵君……なにこの展開!!

って、私にもとうとう春が!?

「頼む! 妹の調査に協力してくれ!」

「……………」

うん。分かってた……分かってたけど! 少くらい期待しても良いじゃない!!

急に黙り込んだ私を不思議そうに見つめながら葵君は手を合わせてお願いポーズだ。

妹の事にはすぐ敏感に気づくのに、私の気持ちには全然……

「…………協力って何を?」

「今日、紅葉がいつもとは違うおめかしをした格好で、凄く楽しそうな笑顔で家を出て行った……しかも、どこに行くのか聞こうとしたら、物凄い形相で『絶対についてこな

いでね』と言われてしまった……」

「……なら、大人しくそうしていれば……」

「——だが！ 兄として妹が変な男に言い寄られて無いかと心配なのだ!! 相手を確認するだけで良い……問題無ければ俺も静かに見守ると約束する。だから頼む！ 拙者が頼めるのは舞殿しかおらぬのだ」

そう言つて、今度は両手で私の手を掴み取り、真っ直ぐに、真剣な瞳でお願いしてくる兄バカな葵君。またドクンと別の意味で私の心臓が跳ね上がる……ううううこれを私に断れつて言うの!?! 私………

待ち合わせ場所に着くと、ガクト様はなんと既にその場所に居て（ちなみに一時間前）緊張した面持ちで、周りをキョロキョロと見渡しながら、時計を見て苦笑い？ を浮かべていました……なんかかわいい!

「さすがにまだ早いよなあ〜」とか思われているのでしょうか？ いいえ、そんなことはありません！ 初デートだもの……私もすぐに参ります!

あつ、でもさすがに次回からはお互いに早く来すぎない様に話さないかね。

## 筋肉エンド 中編

「お待たせしました岳人さん」

「あつ、紅葉さ………」

声を掛けたところ、私を見て驚いた表情でガクト様が固まってしまった。何か変なところでもあったのだろうか!? と不安になってしまふ。

「あ、あの……何か変なところでもありましたか?」

「……………女神……………」

「……………メガミ?」

「美しい……………ハツ!?——すみません! つい見とれてしまつて!」

美しい……………それに見とれてだなんて!! 心臓が爆発しそうになるのを何とか抑えながら、気合いでガクト様へと私は返事を返す。

天使……………否! 女神がそこに居た。

始めはしっかりと外見を誉めて、好印象をと考えていたのに、現れた紅葉さんを見て、

俺の頭の中は真っ白になった。

不安そうに見つめる彼女に気づき、何とか気合いで意識を戻し、彼女へとあやまった。

「えっと……ありがとうございます。その……お世辞でも嬉しいです」

「お世辞だなんて！ 素直な俺の感想です!! ハッ!?」

お互いに顔を赤くし、照れていると……ふと——周りの視線がこちらに向いている事に二人は気づく。

「と、とりあえず移動しましょう！ 開場時間にもまだ早いので、その辺の喫茶店で

も」

「そ、そうですよね！」

そして二人は近場にあつたカフェに入ってしまった。

「む、カフェに入ってしまったか……」

「……………(ドキドキ★)」

皆様こんにちは……花京院 舞です。現在私たち——葵君と私は、一定の距離を保つ

て、二人を尾行しています。

結局、葵君のお願いを断る事が出来ず、紅葉には悪いと思いつつも、葵君の助手をしております。ん？ よくよく考えてみたら、今葵君と私……初めて二人でお出かけ！  
つて考えたらず少し嬉しくなったが、前に行く二人の様な甘い展開も無く、デートとは  
言えないか……………

「むむ、さすがにあの小さなカフェに入っていくのは危険過ぎるか……仕方ない。舞殿、  
我々もしばし……舞殿？」

「——あつ、ごめんなさい。うん、見える範囲で一時尾行中止かな？」

「そうでござるな。立ちっぱなしもなんだし、斜め向かいのバーガー屋にでも入って、出  
てくるのを待とうか」

そうして私たちも、別のお店へと入っていった。

ここはとある町カフェ……今日も迷える子羊たちが癒やしを求めやってくる……

「いらつしやいま——『え、マスター!?』——おやおや」

「あれ？ なんているの？ ここ仏の喫茶店じゃないよね」

「いや、一応は仏の喫茶店ですよ。ただ、気まぐれ営業の二号店ですが」

仏の喫茶二号店……夜営業のみの洋食店を営む友人のお店をたまに間借りして、営業している二号店。本店と違い、市街地のど真ん中なのもあり、ちよつとした顧客創造と気まぐれでやっています。

「気まぐれ営業って……どうなんですか？」

「ここでファンになつてくれたお客様で、本店に来てくれている方もいらつしやいますし、少し前ですが……テレビの取材も受けましたよ」『気まぐれ営業の隠れた絶品カフェ☆』と視聴者から複数の投稿があつたらしく、それなりの売上も出てますね」

「へえ」と関心する二人を見ながら、とりあえずカウンターの席に誘導する。

「じゃあ、今日は本店は休みなんですね」

「ええ、そのかわりに海人君たちがバイトで喫茶店の大掃除をしてくれています。川神さんや黛さんもお手伝いに来られてましたよ」

「まゆつちが朝から気合い入つてたのはそれが理由か……」

「こちらとは違い、あちらはバチバチやつてるかもですね」

「えっ!？」

そう言いながら、いつもと違い着飾つた二人を微笑ましく見つめる。

「さてメニューですが、私に任せて頂いてよろしいでしょうか？ お二人に合つたチョイスを私から差し上げたいと思います」

「えつと……紅葉さん、良いかな？」

「はい。なんかドキドキワクワクです」

さて、これから進んでいくであろう若人たちへ、ささやかなプレゼントといきまじょうか。

しばらくして一杯の紅茶と薄いピンク色のゼリーが運ばれてきた。

「ローズヒップティーに、丁度川神さんから試作依頼を受けていた桃のゼリーです」

「……良い香りですね」

「……………マスター……………これは……………」

純粹にハーブの香りを楽しむガクト様……………しかし、この二つに込められた思いに私は気づいてしまった。

マスターを見ると、にこやかな笑顔で「どうぞ」と言ってきた。これはきつとマスターの応援なのだろう。私は素直に感謝の気持ちを込め、頂くことにした。

紅葉さんの方はどうやら気づいた様ですね。

ローズヒップティーは、一般的に恋愛に良いとされる紅茶の中でも、その色から赤い糸を彷彿とさせ、楽しく充実した恋愛を運んでくれると言われています。更に桃のゼリーは、『桃』は万能の食べ物。風水では恋愛運を上げるのに最強の食べ物と言われています。

そんな二つの組み合わせで、二人の恋愛をサポート!!……なんてな。

「ごちそうさまでした！」

そろそろ会場に向かうのに良い時間帯になってきました。お互いに席を立ち、ガクト様がお会計をしようとしたところで……

「今日は私からの応援も兼ねて、おごりです。お二人の未来に幸あれ」

そう言われ、ようやくガクト様もマスターの微笑みの意味に気づいたのか、少し顔を赤くして、感謝の意を伝えていた。

「良いのですか？」

「はい。でも気になるのです……改めてまたお二人でいらして下さい」

そう言われて、少し私も顔が赤くなった気がした。そして私たちはカフェを出て……もし、さっきの紅茶とゼリーの意味も教えたら、ガクト様はどんな反応をしてくれるか



な？　などと考えながら、私たちは会場へと向かった。

「舞殿は何か良いかな？　付き合ってもらっている手前、奢らせてもらうでござるよ」

「只今コラボキャンペーンで、カップルでお越しの方にはこちらのセットをお勧めしております！」

「カ、カップル!?　拙者と舞殿は『このセットでお願いします!!』……ええ!?!」

軽く葵君の腕に寄り添って……「このセット限定ストラップが欲しくなつて」と耳打ちをする。そう伝えると、葵君も納得したのか、それを注文してくれた。

商品を受け取り、窓際の席に移動すると、葵君が二つのストラップを両方私に渡そうとしてきたので、一つを彼に押し付ける。

「葵君は周りから少し固いイメージを持たれてるから、こういうの着けて印象を柔らかくすると良いと思うよ」

「そうでござるか？　拙者あまりこういう物に興味は無くてな」

「まあ、良いから良いから」

そう言つて強引にストラップを着けさせる。

「ふふふ、おそろいだね」

これくらいの役得はあっても良いよね？

その後、お互いの岳人君への印象を話したり、雑談をして、二人がカフェを出たのを見計らって私たちも店を出て、前の二人に続いた。

「ん？ あの二人は……おやおや、こちらも穏便には済まないやもしれませんね」

そんな事を考えてたら、来客を知らせるベルが鳴る。

「いらつしや……チエルシーさんでしたか」

「はい。海人君に聞いたら、今日はこっちにいると聞きまして……その、またご教授頂けたらと」

「構いませんよ。まあ、とりあえずカウンターへどうぞ。私も一休みしようとしていたところでしたので……」

カウンターを勧め、先程のセットを二人分用意する。

「ローズヒップティーに、ピーチゼリーですか？」

「ええ、先程とある若人二人に私からプレゼントさせて頂きました」

「まあ！ この組み合わせとなると……」「ふふふ、そういう事です」

さすがは弟子二号……ちゃんと理解していますね。

「良いですね……マスターにはそんなお相手いないのですか？」

「さて、どうでしょうね？（いますよ。今日の前に……）」

私もそろそろ決断の時でしょうか……

くっ・っ・くく

## 筋肉エンド 後編十

プロレスの試合会場に思ったより早く到着した私たちは、入場開始までしばらく時間が合ったのでイベントをやっている広場の方にやってきた。

「いくつかお店が出ていますね、何か見てみますか？」

「そうですね……時間つぶしに——『キング・マッス〜ル!!!』——うわっ、なんだよいきなり」

突如広場内に響き渡った大声で、お客さんの視線が一点に集中する。するとそこには団体内筋肉最強の覆面レスラーマッスルキングが腕を天に振り上げ、佇んでいた……うん。良い筋肉してるね☆

「さあさあ、スペシャルイベントの開催です！ 集え筋肉自慢の男たちよ!!」

司会と思われるレスラーの方の話によると、スペシャルイベントでマッスルキングに腕相撲で挑戦し、クリアした先着四組様をリング四つ角のスペシャルシートにグレードアップご招待との事です。内容はマッスルキングの猛攻に10秒耐え切れればクリアとの事でした。

「これは俺様の見せ場到来！ って感じですね。紅葉さんの為に勝利をもぎ取ってきま

す！」

ガクト様が腕まくりをして、ガッツポーズでニカツと私に笑いかけてきました……素敵です☆

そして、数組の待ちの後、私たちの番がやってきた。

「さあさあ、現在クリアはギリギリ10秒耐え抜いた一組のみです！ おおっと!? 次はなかなか良い筋肉のお兄さんですね！ お連れさんとカップルで観戦ですか!?!」

「カ、カップル!? いや、えと……」

司会の方の発言にガクト様と二人、顔を赤くしてしまう。

「女とイチャコラしてる男に負けるわけにはいかん!!」

「おおっと!? マッスルキングがやる気になってるぞ〜これは彼女いない歴〓年齢のマッスルキングの逆鱗に触れたか!?!」

「余計なお世話だ！ てか余計な事言ってるんじゃないやねえ!」

バチンとマッスルキングの手のひらが司会レスラーの頭に振り落とされた……あれは痛そう。

「アイタタタ……失礼しました。では気を取り直して……はい、組み合って……ファイ

トー」

開始の合図とともに二人の筋肉と筋肉がぶつかり合う……初動は引き分け、けど少しずつガクト様を押されている。

「岳斗さん、負けないで！」

ガクト様の背中に向け声援を送る。すると、少しずつ押され気味だったガクト様が盛り返してきた。

「グヌヌウ〜（な、なんだと?! この私を押し返されるだ?!）」

「オオラアアアア!! これが愛の力だあ!!!」

「ヌウオオオオオオ!!」

ガントツと手の甲が試合台に叩きつけられる音が響く……ガクト様の……勝利です！  
ガクト様素敵……しかも「愛の力」だなんて……もう、これは告白と取っても良いですか？ 良いですよ私？

「……………まさか……マッスルキングが負けた？ まさかの耐えるどころか勝ってしまいました、この青年！ 問答無用のクリアです!!」

広場内が歓声に包まれる。ガクト様輝いてます……もう、どれだけ私を惚れさせれば気が済むんですかあなたは……我慢できなくなった私は、軽くだけ勝利の余韻に浸るガクト様の腕に抱きついた。これくらい良いよね？

「素晴らしい筋肉だ青年よ」

「いえ、あなたこそ素晴らしい筋肉でした。俺だけの力だったら負けてましたよ」

「ふつ、言うな……チツ、まあ今日は二人とも楽しんでいってくれ」

「ありがとうございます！」

岳斗とマツスルキングの二人が腕を組み、間に紅葉が入り、記念撮影を行う。筋肉の友情が生まれた瞬間である。

その頃、尾行組二人の葵と舞は隅の方で岳斗と紅葉の二人を見つめていた。

「まさかまさかの、岳斗君勝っちゃったね」

「……………」

「……葵君？」

無言のまま二人を見ていた葵君はふと振り返ると、満足した表情で話しかけてきた。

「舞殿、今日はわざわざ付き合わせてしまい申し訳なかった。拙者たちはそろそろ帰ろう。」

「——えっ？ まだ途中だけど良いの？」

「今日、彼を見てきてそれなりに彼を理解することはできた……ま、まだ完全に許した訳ではないが、とりあえず彼がアツイ男だと理解する事はできた。だからしばらくは様子見にしようと思う」

「そっか〜（ああ〜これで葵君との初めてのお出かけも終わりか〜）」

「家まで送るでござるよ」

「うん。ありがとう……（頑張りなさいよ紅葉）」

こうして私たちは帰路に着いた。

プロレス観戦が終わり、再び駅前へと戻ってきた。試合後に、プロレス団体の責任者の方がガクト様をスカウトにくるといふサプライズもあったが、ガクト様は誘いは受けず、とりあえず名刺を貰う形になっていた。

そして、そろそろお別れの時間……

「岳斗さん、今日はありがとうございました」

「い、いえ、こちらこそ一緒に行けて凄く楽しかったです！」



笑顔で微笑みかけてくるガクト様に対して、私は……私の気持ちを押しさえきれそうにありません。

「岳斗さん……また私とこうしてデートしてくれませんか？」

「——えっ!? も、もちろんです！ 俺なんかで良ければ、喜んで!!」

「でも私は……次は友達としてデートではなく、恋人としてデートがしたいです……」

思いを込めて、ガクト様の瞳を見つめ、私の気持ちを伝える。

「……………ハッ！ そ、それは!？」

「……………岳斗さん、私は……『ちよつと待って下さい!』……えっ?」

告白しようとしたところでガクト様から待つてが入る……どうして?……私の心の中に不安が広がっていく。

「そこから先は俺に言わせて下さい。紅葉さん、普段の清楚なあなたも、筋肉の事になるとテンションの上がるあなたも、俺は大好きです！ 次はあなたの男として、恋人として俺とデートして下さい!!」

ガクト様が頭を下げ、手を差し出して来る……そんなの……私の返事は決まってる。

「……………はい」

ガクト様の手を取り、再びお互いの視線がぶつかり合い、少し照れくさく笑い合う。こうして私の恋は新しいスタートを切った。

お・ま・け

→その後の布仏家長男のまじこい→

【松永燕】

高校三年次に川神学園へ転校。その際に近衛葵から告白されるが、もともと異性としては対象外だったために断る。

川神学園にて直江大和と出会い、可愛がっていく内に恋に落ち、とある事件で大和に助けられ、大和から告白された際にOKし、交際をスタートさせる。

【花京院舞】

葵が燕に振られた後、雨降る公園のベンチで傘もささず佇む葵を見つけてしまう。必

死に葵を元気づけようと声を掛けるもの、その手は振り払われ、拒絶される。

ずっと好きだった相手に振られ、泣き出した葵の側で、その気持ちがある意味一番分かる舞は、我慢できず自身の思いをこのタイミングで卑怯かなと思いつつも葵に伝える事にする。

舞の気持ちを知らなかった葵は、更に自己嫌悪してしまい「今の俺では気持ちに答えようもない」と告白を断つてしまう。舞はそれでも諦めず「今は気持ちを知ってもらっただけで良い……だから少しだけで良いから私の事を意識してほしい……それとも、私じゃ全く見込み無いか……」と言ったところ葵は「時間が欲しい。今すぐ返事は出せない。それでも待ってくれるか」と答えた。

こうして友達以上恋人未満のような関係がスタートする。

しばらくして、燕に恋人が出来たと伝え聞いた段階で、思いが完全に吹っ切れたのか、葵が舞に正式に交際を申し込み、付き合う形となる。この間、影で紅葉が暗躍していたのは言わずもがなとしておこう。

### 【近衛紅葉】

順調に関係を深めていった二人は、なんと岳斗の高校卒業に合わせて、婚姻届を提出。晴れて夫婦となる。

岳斗は卒業後は改めてスカウトが来た真日本プロレスに入り、マッスルキングとともに

に怪力コンビとして活躍し、数多くのタイトルを獲得していく。人氣が絶頂になったあたりで、九鬼財閥に就職した大和に紹介され、九鬼従者部隊に就職。

紅葉は大学に進学し、企業に就職するが、岳斗が九鬼従者部隊に入った辺りで第一子を授かり、それを境に退職し、そこからは主婦として子育てしながら島津寮で寮母見習いしながら夫を支えていくこととなる。

## 学園編 一話 武士道プラン

「これにて武士道プランの転校生紹介は終わりとなるが、今回儂の特別推薦であと一人転校してくるようになった」

鉄心学園長の言葉に合わせ、一人の青年が壇上にあがる。一部の彼を知る者たちが驚きの顔でマイクを手にした彼を見ている。

鉄心との話で彼が転入してくることは一部の教師のみしか知らされていなかったからである。無論、大多数の人間は彼の事を知らない為「エッ、誰？」状態なのであるが………

彼がマイクで自己紹介を始めようとしたところで、それを遮るように一人の少女が叫び声をあげる。

「か、海人!? ナンデ!?!」

叫び声をあげたのは学園長の孫にして、武神川神百代である。そんな彼女をチラリと見た海人は百代に軽く手を振った後、そのまま自己紹介を始めた。

「この度、鉄心学園長の推薦もあり、三年年の残り少ない期間ですが、この川神学園で共に学ばせて頂く事になりました布仏海人です! 宜しく願います!」

「知らぬ者が多いと思うから言っておくと、一時期噂になったモモ……武神に勝った奴がいるというアレの当事者じゃ」

ニヤリと笑う鉄心の言葉に、海人を知らない生徒達が驚愕の目で彼を見る。そして様々な感情が飛び交う中、鉄心の次の言葉で更に場はヒートアップすることになる。

「彼の実力を懐疑的に思う者も多からうから今から軽い模擬戦をしたいと思いますのだが、我こそは！ という生徒は居らぬか？」

鉄心の発言に合わせ数人の手が挙がる。

「モモ、お前は駄目じゃ！」

「何でだよ！」

「絶対軽い模擬戦にならないじゃろうが！ 結界を張るこっちの身にならんか……って、何故にヒュームまで挙手しとるんじゃ!？」

「俺もI-Sの生徒なのだから参加資格はあるだろう?！」

「流石にヒュームさんは勘弁してほしいかなあ……（転校初日に保健室行きは流石に嫌だよ）」

「同理由で却下じゃ！ あと挙手しとるのは松永燕と……ほう、黛由紀江か」

本当ならば他にも挙手しそうな生徒は多数いたのだが、百代とヒュームの圧力に抵抗して挙げられたのが二人しかいなかった。

冷や汗を垂らしながらもしっかり拳手している燕に、二人の圧力にビクビクしながらもかろうじて手を挙げている由紀江である。

「二人なら大丈夫と思うが、どちらにするかな?」

「二人共で良いですよ。その代わり模擬戦内容は俺が決めていますか?」

「内容にもよるが、二人は構わんか?」

燕と由紀江の二人が頷く。

海人の説明によると模擬戦時間は五分。その間海人は回避と防御のみを行い、決定打を一撃も食らわなければ海人の勝ちというものであった。

「なぜ反撃しない?」という百代の質問に海人は少し考え込む仕草をしたあと……………  
「なるべく女性に怪我をさせるような行為はしたくないから」と爽やかな笑顔で述べたのだった。

その発言に一部の女性陣（誰とは言わないが笑）の胸が一瞬キュンと鳴ったのは気のせいとおこう。

「そういう発言を素で言っちゃうのは変わってないのねっ」

「まあそれも海人さんの良いところですよ」

「……………んっ?」

燕と由紀江がお互いの顔を見ながら、納得したような表情になる。

「そういえば由紀江ちゃんも……………」

「そういえば松永先輩も……………」

二人は相手が以前海人が武者修行の時に訪ねた相手であったことを思い出し、何か共感したものを得たのだった。

「それじゃ由紀江ちゃんは思うままに攻めて構わないから。私はスキを突いての一撃を狙うわ」

「分かりました。先陣、黛由紀江行かせて頂きます！」

海人の実力を知る二人だからこそ、二対一の模擬戦でも文句は言わないのであった。双方に準備が完了したのを見て、鉄心が開始の合図を出したのだった。

「試合開始じゃー！」



## 学園編 二話 3—〇入学

「いらつしやい！ 海人（君）☆」

教室に入ったところで百代と燕さんからの歓迎を受け、そのまま自分の席となるのであろうところまでズルズルと引つ張られて行つてしまふ。

「さっきの模擬戦は流石と言つたところだつたな」

「結局、一撃も決定打入れられなかつたし！」

燕さんの言葉にもあるように模擬戦は五分間耐えきつた俺の勝ちで終わった。正直ギリギリの勝利だつた……二人共々、以前試合した時よりも強くなつて、特にまゆつちの剣速の速さには驚いた。今でこそ見切れる様には成つたけど、当時の剣聖黨十二段と遜色無い速さだつたしね。

「攻撃力に関しては周りに被害がいかない様に抑えてたけど、他はほぼ全力でしたよね？ 燕さんもまゆつちも……」

「な、なんの事かなあ〜?」

「ほう、あれが燕のほぼ全力か……」

自身の実力をなるべく隠している燕にとって、今の情報は熱くなつてしまつたとはい

え、あまりよろしくないものである。特に百代に關しては九鬼紋白からの依頼の件もあり、なるべく秘処したいところであった。

「フツフツフ……勘違いしているようだね！ さつき見せたのが本気だと思つたのかな!? 私にはまだ二段階の変身が残っているのですよ海人君？」

「なに!? そのフオーザ様の発言!?!」

海人と百代のセリフが被さる。

咄嗟に出た燕の発言。これはある意味本当であり、嘘でもある。場を有耶無耶にする為に咄嗟に出たセリフであるが、現状の燕では確かにほぼ全力であつた事に間違ひは無いが、彼女には秘密兵器があるのだが、それはまた別のお話で……………

「それよりさ海人君……まゆつちやモモちゃんはニツクネームやタメ呼びなのに私だけ『燕さん』で敬語なのはどうかなのかなあ?」

困つた時は話題転換……ですよね?

まゆつちは武者修行以降、たまに相談や雑談を交わす友人で、松風から「ハイ! 海人坊、なんならお前もまゆつちって呼んでやってイイんだぜ☆」と言われ、それからはまゆつちと呼んでいる。燕さんは連絡先は交換したもののあれ以降一度だけ交流試合をしただけだつたからなあ……………

「とりあえずクラスメートになつた訳だし、これからは敬語無しでいこうなんなら海

人って呼び捨てより何かニックネーム付けたほうが良いかな？ 例えば「カーくん」とか？」

「それはやめて！ 普通に海人でお願いま……お願いま！」

呼び方を「カーくん」と呼ばれ、それを必死に止めた海人である。

一人の人物が頭に思い浮かんでしまった……それを許せば恐らく宇宙規模で天災なス〇ーカー兎※が突撃して来る未来が見えたからである……

「何か分からないけど、じゃあ海人って呼ぶね★」

「ムムム………（なにやら海人に謎の女の影が………）」

場が一旦落ち着いたところで、三人のところに近づく二つの影が現れる……それはまた次回のお話。

## 学園編 三話 四天王

場が一旦落ち着いたところで、二人の生徒が海人の机に近づいてくる。

「H A H A H A 転校生はモモと燕の知り合いカ」

「三年も更に賑やかになりそうで候（うわあ……近くで見ても爽やかなイケメンね！

エレガント・クアットロには劣るけど……イイわ☆）」

「おつ、会長にユーミンか。なんだ、海人とお近づきになろうってやつか？ 駄目だぞ！

海人は私のモノだからな！」

突然の百代の私のモノ発言にガヤガヤと賑やかだったクラス内が静寂に包まれ、皆が皆この五人の会話に聴き耳を立てる状況になってしまう。

「エツ？ それって布仏殿と百代はつ、つつ、付き合っていると云うことで候？」

「海人ハ百代ノ連れ合いナノカ!？」

クラス内が驚愕といった雰囲気になる。女子はフツと湧いた恋バナに興味深々で耳を傾け、男子は妬むような視線で海人を見つめるのだった。

「いや、まだ付き合ってる訳では無いよ」

「かいとおおおお（・ω・）シユン」↑注、百代

「海人君は私の方が良いんだもんねっ☆」

海人が普通に否定して、百代が沈んでいると、悪乗りした燕が乗っかってくる。しかしそれは復活した百代がバツサリと切り掛かる。

「燕は最近、ウチの大和にちよこちよこちよつかい出してるみたいじゃないか……その上、海人まで持つていこうとか許さんぞ#」

「アハハ……冗談だつて！」

「とりあえず殺気抑えような百代。それと二人を紹介して貰えると助かるんだが……」

海人が場を宥め、二人の方を見つめる。

「紹介ナラバ自分デシヨウ！ 我ハ南條・M・虎子。ズバリ生徒会長ナノダ！ 困ツタ事

合ツタラ言ウトイイ！」

「私は弓道部主将で矢場弓子で候。何か困った時には私も手を貸そう」

生徒会長の南條さんに、弓道部の矢場さんか……ん？ 弓道……矢場……？

「もしかして中一の時、年代別弓道全国大会で中学生の部優勝してた矢場さん？」

「むっ、某を知ってるのか？（えっ、まさかの私知られてた!?!）」

「やっぱりそうだ！ 当時、弓を集中して覚えてた時に一度だけ腕試しで大会に出たん

だけど、その時一年生なのに優勝してた矢場弓子さんだ」

腕試しで出た弓道大会……俺はベスト16までしかいけなかったんだけど、その時優勝して、天才弓道美少女と少し話題になってたはずだ。

「あ、あの時いたの!？」

「矢場っち、口調が崩れてるよ」

「俺はベスト16だったけど、天才弓道美少女現るって少しニュースになってたよね!」  
「……コホン。当時の事は忘れてくれるとありがたい……で候（うわあゝ恥ずかしいよ）まさか当時の事覚えてる人がいるなんて!？」

まさかこんなところで再会しようとは……一年生だけなら矢場さんに次いで二位だったから、その時の悔しさから覚えてたんだよね。

「普通に海人のベスト16もスゴイじゃないか! メインで使ってる武器でも無いのに」

「二通り武器の扱い方は燕さ……燕同様覚えさせられてたからね」

「だからって私は大会の上位入る程の鍛錬はしてないよ?」

「海人ハ色々起用ナノダナ!」

四人に囲まれ楽しそうに話す海人。他のクラスメートの女子はともかく、男子からはクラスの美少女四天王に囲まれる海人を羨ましく妬むように視線を見つめる目が多かった。

その中でも武闘派の集まるグループが特に海人を妬ましく見つめていた。

## 学園編 四話 決闘

「転校生の奴、ウチのクラスの綺麗どころに囲まれて羨ま……羨ましいんだな」相撲部長  
長

「百代さんだけでなく、俺の納豆小町まで知り合いつばいし、あいつ何モンだよ」柔道部  
部長

「俺の……じゃないからな。俺らの燕たんだぞ、こら！」空手部部长

「いつも凛々しく美しい部長がテレてるだと……あんな表情僕には見せてくれないのに  
……」弓道部副部长

海人に対し、明らかに敵意を持つて見つめる四人は、皆全国クラスの猛者たちであり、  
三年の中でも一目置かれてるグループである。

「模擬戦を見るに実力者なのは分かるが、相撲でなら負けなんす！」

「俺だつて柔道でなら負ける気はないぜ！」

「俺だつ——『言ったなお前ら……』——百代さん!？」

四人の陰口を聞いていたのか、いつの間にか百代が四人の前に立ち、ニヤリとした表  
情で四人を見下ろしていた。



「ゴフツゴフ……で？ 儂いきなりモモに引つ張られて来たんじやが？」

学園長室で資料とにらめっこしていた鉄心は、いきなり現れた百代に首元を捕まれ、グラウンドへと引つ張られて来たのだった。

「決闘、審判ヨロシク！」

それだけを告げ、百代は燕達のいる応援席に飛んでいってしまったのだった。

「……このことじゃが、決闘の立合いで良いのかのう？」

各部活用の格好に着替えた四人が頷く。その瞳は海人と違い熱く燃え上がりヤル気に満ちている。なぜそんなにヤル気なのかというと……

時は少し遡り

「言つたなお前ら……ならお前ら四人、各部活動で海人と決闘してみろ！ もしお前達の一人でも海人に勝てたなら、私が一日冥土（〇）になつてやろう」

「……俺が川神さんの御主人様に……」

「百代様がご奉仕……」

「……………」

頷きあつた四人は、海人の机に移動し、同時にワツペンを叩きつけた。そして嫌そうな表情をする海人の返事を聞かず、海人の胸からワツペンを取つた百代がその上に叩きつけたのだった。

場は戻り……一人目と思われる相撲部部长が前に出ると、流石に諦めが着いたのか海人もグラウンドに即席で

作つたりリングの中に入り、構えを取つた。

「海人よ、今回は相撲のルールに則つた試合じゃろ。両者が両こぶしを一度下ろした時点で試合開始じゃから」

「アッ……」

ハツとしたように海人が構えを解き、しやがみこんで拳を地に下ろした……………

「ところでモモちゃん、あんな約束して大丈夫だったの？」

「海人が負けるわけ無いだろ？」

「私も普通ならそうは思うけど、今回弓道に関しては何分かんないじゃないかな？　中一の時に全国ベスト16って言っても、専門でやってるって話してでもないし」

「……………アツ……………弓子、あの弓道部の奴の実力は!？」

「上位入賞経験は無いが、現役で全国大会に出場するくらいの实力はあるで候」

「それだと私だったら完全弓道ルールだと負けるかなあゝ」

「……………だ、だか海人が勝っても負けても私的には大丈夫だ!」

「どういうこと？」

「フフフ……………」

「モモヨ……………凄く悪人の顔シテルネ……………」

燕の発言に一瞬困惑を見せた百代であったが、一転不敵な笑みへとそれは変わる……………

メイド……………冥土？

## 学園編 五話 VS相撲部&amp;柔道部

「フーン」

両者の両こぶしが地に下ろされたタイミングで、相撲部部長の勢いのあるぶちかましが海人の胸を打つ。それを受け止めた海人であったが、勢いに押され少し体を後退させる。

このまま押し出すつもりでぶちかました相撲部部長であったが、動かなくなった海人の体にこのままでは無理だと頭を上げ、自身の必殺技である張り手技【千手観音】を繰り出す。

「ハアハアハアハアハアツ!!」

無数の張り手が海人に迫るが、避けられるものは避け、当たりそうなものは受け流すことで、全て回避してみせる。

「はあ……はあ……儂の【千手観音】が一撃も当たらんじやと」

「【千手観音】か……千手って言うならこれくらいは打たないとね」

そう言つて海人は腕にグツと力を溜めるような仕草をしたあと、さっきの相撲部部長のように張り手の連打を打ち出した。

ペタリ。

次の瞬間、相撲部部长は尻もちを付き、呆然とした表情で海人を見ていた。

「勝者、布仏海人！」

「よし。まず一勝！ いいぞー、海人☆」

百代の応援に軽く手を振る海人。初戦は危なげ無く勝つたのだった。

後に、新聞部からの取材で相撲部部长は語った。

「人にぶちかました感触じゃなかった……そして奴の張り手は一瞬だけ見えたが、儂の全身を包み込むような量の数の張り手が目の前に迫ってきて、気づいたらその圧力だけで尻もちを付いてしまっていた……あれを見たら自分の張り手に【千手観音】なんて名前付けるのもおこがましいとさえ思ってしまったでござす」

「さて、次は誰が来ますか？」

「俺が行こう」

腰を上げたのは、柔道部部长。身長198cm体重1\*\*kgとガタイがでかく、海人も175cmと決して低い訳では無いのだが、並ぶとその体格差がよく分かる。

「体格差、圧倒的ネ！」

「だが私は海人が投げられる未来は見えないな！」

「うん。私も」

「そんなに!?……コホン……で候か？」

女性陣の会話に柔道部部长が気合いを入れる。そこまで言われ投げない訳にはいかない。

これでもこの部長は団体主将であり、つい先日行われた全国大会でも100kg超級準優勝に輝いた猛者である。それは学園内でも表彰され多くの者が知るところであり、海人を良く知らない人からすれば、柔道部部长が勝つと思ってもおかしくはない。

その上、柔道は重量別に階級分けしてあるように体格差が大きなハンデとなる為である。

「試合開始！」

鉄心の開始の合図とともにスタスタと柔道部部长の方へ歩いていく海人。その様子はどうぞ投げて下さいとスキだらけである。

「!?……………なっ……………めるなあ!!」

海人の服を掴むと同時に踏み込み、自身の一番得意な技である【内股】を仕掛ける。部長にとって完全に決まったと思った【内股】であつたが……

ピタリ……………

場が一瞬停止する。柔道部部长は技を仕掛けた状態で固まり、海人は重心を下げた形で踏ん張つたような姿勢で二人が固まつた状態になる。

「流石ですね。全力で踏ん張つてなかつたら、投げられてましたね……………ツツ、そおーい！」

海人が柔道部部长の道着を掴み、足を引つ掛け、そのまま反対側に引きずり倒す。

「一本! それまで。勝者、布仏海人!」

「流石海人! なっ☆ 投げられなかつただろ?」

「海人、スゴイナ!」

「……………(あれだけ綺麗に決まった【内股】踏ん張るってどんな体幹してるのよ海人君)」

海人から差し出された手を取り、立ち上がった柔道部部长の姿を見て、観客の多くが歓声をあげる。

海人株急上昇→(主に女性陣)

後に新聞部からの取材で柔道部部长は語った。

「巨大な岩を背負った様な感覚がした……もう二度と奴とはやりたくないな……」



## 学園編 六話 VS 空手部&amp;弓道部 十無駄コラボ(笑)

「あと二人」

海人が振り向きざまにそう言うと、残った二人はビクリと反応をみせた後に……………

「空手部部长は辞退しちゃったんだよね……………しようもない」

場所は変わって島津寮。海人の歓迎会を終え、居間に残る海人と直江大和、椎名京、クリス、まゆっちがテーブルを囲うように座っている。

京のツツコミに始まり、他のメンバーも各々の感想を言い合う。

「海人さんの実力を考えれば先の三人はともかくでしたが、弓道部副部长の方にも普通に勝たれたのには驚きでした」

弓道部副部长とは決闘したものの、百代達の心配を裏切り、完勝とは言わないが、普通に勝ってしまったのだ。

「イメージのモデルにしてる人が素晴らしいからね。それに元天下五弓に指導してもらったこともあるし」

「それってまさか……」

大和の発言に海人は頷いて返す。海人のイメージモデルとなっているのは誰を隠そう大和に寄り添うように座っている椎名京その人であり、現天下五弓の一人であり、指導したのは京の父である。

「弓を構えた時の京さんはキツとした美しさの中に、構えも正に見本の中の見本というべき綺麗さがあつて凄くお手本になるんだよね」

「そんなに褒めちぎっても私はなびいたりしないよくだから結婚して大和♡」

「俺も二人の仲を邪魔する気は無いから〜お幸せに大和君☆」

「お友達で……って、海人さんまで!?!」

大和の腕に抱き着きながら、愛の告白をする京。しかしその道はまだ遠いようだ。

「……………(私も京さんみたいにスツと海人さんに告白できたら……………)」

『まゆっち、諦めるんじゃないやねえ! 海人坊だつて直ぐにまゆっちの魅力に気づいてくれるさ★』

心の中で京を羨ましく思う由紀江……それを励ます松風であった。その思いが届く日は…………?

そうこうしていると、今まで黙っていたクリスがテーブルを叩き立ち上がり、海人の前まで歩み出る。

「むうく皆は既に親しそうで羨ましいぞ！ 私とも決闘しろ、海人殿！ 先のルールでフェンシングでどうだ!?——『そうです！ そして、私とも決闘なさい、布仏海人!』——この声は!!」

ボタンとふすまが開き、そこには赤い髪を靡かせ、軍服を着た一人の女性が……………

「お嬢様!」

飛び込んできたクリスを抱き締め、殺気混じりに殴り込んできたさつきまでの表情は緩み、今は優しい表情でクリスの頭を撫でているマルギツテ・エーベルバッハの登場である。

無駄コラボ（笑）

「海人…………お前のひいおじいちゃん（曾祖父）※だぞ!」

仏の喫茶店で海人がバイトをしていると、突然中学生くらいの子にそんな事を言われるのであった。

「えっ?…………もしかしてBad★Endの方の主人公の有川大和さん…………ですか? アレッ? 何か若返ってませんか!」

「アツ……そうか、前回会った時は本来の年齢の時だったもんな」

「????」

かくかくしかじかうまうまやつほい……（詳細説明中）

「はあ……それでひいおじいちゃんってのは？」

「最近カシンに聞いて……ああ、カシンっていうのは代々有川家の守り神をしてくれてた……まあ、幽霊みたいな者でね」

『ふむ。ちゃんと力を使いこなせておるようじゃの』

会話途中でカシンが大和の影から海人の背後に移る。

「——！ この感覚って……」

「そういうえば海人は何となく気づいていたってカシンが言ってたね。今海人の後ろにカシンが居るよ」

『ムウ……やはり感じてても、念話は出来ぬようじゃな』

カシンが再び大和の方へと戻り、思念体化する。

「まさかのカシンさんですか？」

『うむ。そうじゃ。こうして海人の前で思念体化するのは初めてかのう』

「そうなんだ。それでね、そのカシンが言うに俺の曾孫が海人になるんだとか。母さんの旧姓は有川だろ？」

「ええ……つて、ホントにひいおじいちゃん!?　けど自分より若い人にひいおじいちゃん言われても違和感しかないよ!!」

「間違いないく有川様は海人君の曾祖父に当たる方ですよ」

「買い出しから帰って来たウォルターが会話に混ざる。」

「マジっすか?」

「『マジ』」

「海人君が高1の時、時空転移の術を完成させたカシンさんが力の一部を残し、有川様の所に飛び立ったって話でしたね」

「高1……じゃあ、あの時の急なパワーアップはそういう事だったんだ……」

話を聞いた海人が少し残念そうな顔をする。

『因みに能力を与えたとは言っても、潜在能力を底上げする力を授けただけで、それは海人自身の力じゃよ』

「いわゆるあれだ……トラコンボール（虎魂球）のラメック星人の最長老に潜在能力を引き出されたアレとおなじだよ。守護霊として離れる時に心配したカシンが海人の潜在能力の一部を開花させただけだからそんなに落ち込むことはないって!」

『むしろ海人には未だ伸びしろがあるからの』

「まだ海人伸びしろがあるのか!」

「そっか」

大和とカシンの話を聞いて、納得したように頷いた海人。

「因みに御先祖様は室町幕府の足利ヨシテル將軍だぞ」

「マジで!? 俺の御先祖様が超偉人！」

そんなこんなで賑やかに仏の喫茶点の日々は過ぎていった。

……

……

## 学園編 七話 ドイツ軍ネタ

「決闘なんだけど……今学園長から禁止させられて、受けられないんだよね」

「なぜだ!？」

海人の残念な返答に、当然の如く食って掛かるクリスとマルギツテであるが、禁止させられては仕方ない。

海人本人としては親睦を深める意味での決闘なら受けてあげても良いと思っ  
ても、海人が強過ぎる事と、先の四人が自信を無くし、最後の大会前にやる気を無くして  
しまった事から学園長に禁止させられてしまったのだった。

「ムムム、ならばどうしてくれよう……あつ、取りあえず紹介しよう。マルさんだ!」  
「マルギツテ・エーベルバッハだ。覚えておきなさい」

紹介を聞いて、海人は以前送別会でドイツ軍を訪れた時の事を思い出す。

「クリスさんやマルギツテさんならドイツ軍ネタで話はできそうだけど……あと、マル  
ギツテさんは昔ドイツ軍で一度会ってますよ」

「ムツ、ドイツ軍でだと?」

「なに!? マルさんと海人殿は知り合いだったのか!？」

「ええ。とは言っても挨拶しただけでしたが」

マルギツテは忘れていたようだが実は二人は一度会っている。海人が第一回モンドグロツソの大会で織斑一夏（原作ISの主人公）の護衛で怪我を負い、暫くドイツに滞在した際に、帰国前に送別会としてドイツ軍黒兎部隊を訪れた際に再び病院送りになる際の途中、帰ってきたマルギツテの猟犬部隊と会い、挨拶程度に紹介されていたのだ。（元の布仏家長男のIS物語のクラ・千冬ルートの過去話です）

「千冬さんが黒兎部隊の教官してた頃なんですけど、覚えてませんか？」

「千冬……織斑教官か！ あの当時となると……」

「黒兎ということは海人殿はクラリツサさんやラウラと知り合いということか？」

「正解！」

クリスの話ではクラリツサは日本好きで良く話し、ラウラも同じ年の為仲良く、よくメールをする仲らしい。

「……思い出した！ クラリツサが黒兎部隊の総力をあげて誰かの送別会をすると言つてた時に来てた少年か!？」

「マルギツテさんも正解！」

意外なところで共通の話題を得た三人はそれから暫く話し込むことになる。

「まさかあの時の少年がこれほどの強者になっていようとは……」



「あの時は怪我人でしたし、今ほど強くもなかったですからね」

「ならなおの事、決闘できないのが悔やまれるな」

残念そうにするクリスを見て、海人は妥協案を出すことにする。

「試合とかではなく、指導目的の模擬戦レベルなら良いんじゃないかな。周りに被害が出ないくらいなの。突きの練習する際にフェンシングも参考にしたし、それなりに自信もあるよ」

「そうかそうか！ ならば御指導賜ろうではないか」

嬉しそうにするクリスを笑顔で見つめていたマルギツテであるが、改めて海人の方を見た時には不満顔で彼を見ていた。

「海人はトンファーは扱えるのか？」

「トンファーかあ……基礎は一応納めたけど、合わなかったから全然使ってないですね」それを聞いたマルギツテは先程のクリスの様に残念そうに海人を見る。

「……眼帯を外さないのを条件に、軽めの模擬戦までなら……」

「ニヤリ。その言葉を待っていた……お嬢様！」

「マルさん！」

気づくと海人はクリスとマルギツテに挟まれ……「L a s s u n s g e h e n  
!! (英語で言うLet's goと同じ意味)」……連行されていった。

「海人さん……………」

クリスさんとマルギッテさんに連れて行かれる海人さんを見ながら、ここで「私も」と言えない自分に…………

「まゆつち」

「あつ、はい。なんですか、京さん？」

「まゆつちはもつと自分に正直に生きないとダメだよ。周りを気にしてばっかじゃ後悔するよ」

「それは…………」

「モモ先輩の気持ちも知ってるから、これ以上の応援はできないけど、まゆつちの事も応援してるから」

京さんにはバレバレみたいです……せつかく同じ寮に住むことになって、アタックするチャンスは増えたはずなのに、私がこうして尻込みしてたらダメですよ。

それに現状最大のライバルと言えるのが川神先輩……武士としては圧倒的に敵わなくても、恋では負けたくない……勝ちたい！

「コレは海人さんの言葉だけ……『俺は自分に正直に生きたい。それにやらず後悔よ

り、やって後悔したいかな？ それで上手くいくのがベストだけどね』ってね」  
グツと心を掴まれたような気持ちになる。それと同時に私の足は駆け出していた。

「いつてらっしやい……」

三人を追いかけて行ったまゆつちを見送りながら、さっきの言葉を【改めて】自分に当てはめる。

「まゆつち、いい顔して出て行ったな……何言っただんだ京？」

隣に私の大好きな大和がやってくる。

「迷える後輩に道標を……ね」

「そっか……」

そういつて私の頭を撫でてくれる大和に、私のテンションは上がるに上がり……

「やっぱり私は大和が大好き！ だから結婚しよ大和♡」

腰に抱き着き大和を押し倒す……そして……

京 捕食者エンド★

……とはいかず、スルリと躲され、いつもどおりに……私も諦めない。後悔しない。止まらない。

## 学園編 八話 のほんさん現る！

クリス&マルギツテによる模擬戦(?)の終わった後、海人は自室に戻りそのまま布団にダイブする。

「危なかった……マルギツテさん、アレ絶対昔の百代並みの戦闘狂だよ。クリスさんとまゆつちが居なかったらヤバかった」

今の百代は精神修行も(嫌々ながら)行っており、昔のような戦闘狂っぷりはありません。

海人が寝返りをうち、大の字に天井を眺めていると着信が鳴り、落ちようとしていた意識が戻される。

『おにいちゃ〜ん、電話だよお〜♪おにいちゃ〜ん、電話だよお〜♪』  
「……………」

間延びしたのほんボイスが鳴り響き続ける。個人設定された着ボイス。相手は誰か分かっている海人だが、出たくない……しかし出ないわけにはいかない。

諦めてボタンを押した海人の耳に飛び込んできたのは、妹の大音響ボイスだった。

「やつほ〜い☆ 転校初日はどうだった、おにいちゃん!？」

「すまん本音。少しボリユームを下げてください」

耳がキーンとなり、妹のハイテンションについていけない海人が懇願する。

「アレ？ おにいちゃん、もしかしておつかれ？」

「まあね……初日から色々あつてね。さつきは河原で猟犬に噛みつかれそうになつたし」

「猟犬？（……猟犬部隊のマルギツテさんかな？）」

海人は知らないが、海人周辺の女性情報は調べつくされているのだ。主に布仏姉妹・幼馴染達による秘密軍団によって（笑）

それから本音による質問攻めが続き、気づけば日をまたいでいたのだった。

「もう……だ……（ー？ー） z z z z」

「おにいちゃん？ まだ質問は終わってない……寝ちゃったか。仕方ない、残りは後日に……おやすみいっく★」

翌朝。

「で、話は考えてくれたで候？」

教室に入り、席についたところで弓道部二人に声を掛けられる。話というのは弓道部

入部に関してだ。

先の副部長との決闘の後、部長の矢場さんから勧誘を受けているのだ。

「最後の大会、海人君が入ってくれれば悲願の団体戦優勝も夢じゃない！」

熱く語る副部長。川神学園はいつも惜しいところで天下五弓毛利元親のいる天神館に次いで二位なのだという。

「それなら俺よりウチの天下五弓の二人にお願いした方が良いのでは？」

「それが……………」

矢場さんの話では、与一君は九鬼の圧力が掛かって勧誘出来ず、本人もやる気が無い事。

京ちゃんは在籍はしているものの、個人練習に来るだけで大会とかは全てキャンセルらしい。射っている姿を見るだけでも良い勉強や見本になる為、それで満足しているらしい。確かにそれは間違いないけど……

「椎名さんも出てくれれば勝ち間違いはないかと思うが……」

「できれば海人君からも説得できないかなって期待もあつたりするで候」

三年からの転入で部活動とかは諦めてた俺としては、この話は最悪受けても良いかと思っているが……京ちゃんの説得は難しいだろうなあと思う。百代から風間ファミリーの話や相談はちよくちよく受けてたし、京ちゃんとも大和君の事で話す事もあつた

しね。

「色々ともう少し考えさせて下さい」

頭を下げ、今日は取りあえず保留する事にした。



## 学園編 九話 椎名京

「あれ？ 海人さん一人ですか？」

「ん？ ああ、大和君丁度良いところに」

弓道部の案件だが、大和君にも相談しようと思っていたから丁度良い。京ちゃんの事なら大和君が一番詳しいだろうしね。

「実は……カクカクシカジカモンモン（事情説明中）」

「無理でしょうね」

即決で答える大和君にやはり一筋縄ではいかないかと考える。

「そこでだ。軍師大和……弓道部マネージャーにならない？ 勿論京ちゃん優先で良いから」

「……………はい？……………俺がですか!?!——いや、それなら確かに可能性はあり……………という  
か来るでしょうね」

流石軍師……直ぐに理解したようだけど、今回はそれだけではない。

「あとね。これは百代から聞いたのと、京ちゃんと大和君を見てて気づいたんだけど、そろそろ京ちゃんももう少し周りとの接触を持たせたほうが良いと思うんだ」

「……それも分かっています。京が俺やファミリー以外の人と交流してない事も。俺に依存してる事も」

これがキツカケになればと思ったが、大和君が言った依存という言葉が気になった。「依存と言ったけど、それは大和君が京ちゃんを受け入れない理由に関係してるのかな？ 応援してる立場としては、なんであんな可愛い良い子の求愛を断り続けるのか分からない」

「それは……って応援してるんですか!？」

ニッコリ笑顔で肯定。

「大和君は京ちゃんには恋愛対象として不満なわけ？」

「そういうわけじゃ……ただ京は過去の事を理由にずっと俺とファミリーだけしか見てないんです。それで俺がOK出したら更に俺に依存して駄目になってしまいうんじやと思っただら……」

「大和君は京ちゃんが【今でも】過去の事だけで自分を好きで依存してると思ってるのかい?」

「……………」

沈黙は肯定と……なるほど、これじゃ京ちゃんがいくらアピールしても駄目なわけだ。

「大和君……君は馬鹿か？ 確かにキツカケはそうだったかもしれない。小学生の頃、自分をイジメから救ってくれた王子様……好きになるのも分かる。だがもう何年経ったと思ってるんだ！ 小学生時代の一、二年間ならまだしも俺たちもう高校生だぞ？」

それに中学時代は親父さんの所に居て、ずっと一緒じゃなかったろ。今は確かにベツタリである意味依存してる風に見えなくもないけど、それは大和君攻略を何よりも第一に考えてるからで、依存とはチョット違う。

それに何年も何年も最前線で大和君の良い所も悪い所も見てきて、それでも大和君が好きで、彼女の想いはそんな軽いもんじゃないんだよ！ OKしたら駄目になる？ そんな事はない。むしろそれから彼女はやつと羽ばたける」

「えらく自信有りげにそう言いきれますね？」

反発するように大和君が言ってくるが……自信……あるに決まってるだろう！

俺は散々京ちゃんの惚気話という名の大和君攻略作戦を聞かされて、相談にのってきていたのだから！

「大和君は京ちゃんが自身とファミリィ以外に交流してないって言ったね？」

「はい……実際寮に入ってからファミリィ以外のメンツと遊びに行ってるってこ見ないし、大抵俺の近くに居ますし」

……確かに。ちよつとやりすぎなのは間違いない。だからこそ今回がチャンスなの

だと俺は息を吸い、再び大和君へ話し出す。

## 学園編 十話 大和攻略作戦

「じゃあまず俺はどうなのよ？」

キョトンとした表情でこちらを見る大和君の幻想を打ち砕く！

「俺は風間ファミリーの一員でもないし、同級生でもないけど以前から京ちゃんとは友達だよ？　ちよくちよく大和君や百代の事で話す仲だし」

「海人さんは姉さんの婚約者だし——『ちよつと待て』——はい？」

今何かおかしな事を言われた様な気がしたが……勘違いじゃない？　えっ？　もうそこまでの話しになってるの?？」

「百代とはあくまで【お友達からの】清い関係であつてだな……」

「リベンジ戦で勝った後の金曜集会で『布仏海斗ゲットだぜ！』って姉さんが珍しく照れた顔で戦勝報告してたからってつきり……」

俺はポ○モンか?!——あつ、でも連絡先は交換したものの、京ちゃんとメールし始めたのはそれくらいだったか。

「そういえばその後からだったね。京ちゃんから『モモねえ泣かせたら弓矢千本撃ち込むから#』って言われたの……それからメールで大和君の事で惚気……相談にのるよう

にもなったし」

「なるほど、そういう経緯でしたか……（京が何話したのか聞くのが怖い）」

あの時の通話越しに感じた殺気は正直身震いするレベルだったからなあ……京ちゃんが大和君とファミリィをどれだけ大切にしているかも伝わってきたし……まあだからこそ応援しようとも思っただけだね。

「それにさ、確かに京ちゃんは普段無口であんまり人と接触しないタイプだとはいつてもさ、それなりに中学時代の友達も居たみたいだし、今でもたまに連絡取ってるみたいだよ？」

「えっ、そうなんですか？ 俺にはそんな事一言も言っただけなのに……」

多分、その友達も惚気話や相談ばかり受けてたんだろうなあ……（笑；）

「この際だから言うけど、もし大和君に少しでもその気があるなら京ちゃんをちゃんとそういう対象として見てあげてほしいかな……俺としてはくっついてくれたら万々歳だけど☆」

「……うっ……その、俺……京の事、ちゃんと考えてみます！」

ニヤリと笑顔で大和君に話すと、彼は照れながらも真面目な顔で走り出した。

それから暫くして、何がどうなったのかは知らないが、京ちゃんが「直江大和、討ち取つたりい！♡！」と交際報告をしに部屋に雪崩込んで来るのにそう日にちは掛からなかった。その後、大和君から「次は海人さんですね……姉さんかそれとも……」と酷く疲れた表情で言われたのは我ながらグサリとくるものがあつた。

因みに、大和君がマネージャーとなり、弓道部に顔を出す様になつた京ちゃんは後輩達の良き見本となり、両部長と俺、京ちゃんと一年のムサコツス（武蔵小杉さん）で挑んだ三年最後の団体戦は無事決勝まで登りつめ……

川神院      v s      天神館

大前      部長      部長

2番      ムサコツス      二年部員

中      海人      副部長

落ち前      副部長      三年部員

落ち      京      元親

の順番で行われ、延長にもつれ込む接戦ながら、皆中を決めた京ちゃんの活躍もあり、川神学園が毛利元親率いる天神館を破り、部長達念願の優勝を果たす事となる。

泣きながら京ちゃんに抱き着いた馬場部長が次期部長を京ちゃんに打診していたが、そこは断る京ちゃんなのであつた。次期部長は一年ながらムサコツスが引き継ぐ事と

なるのは後の話………



## 学園編 最終話

大和君と京ちゃんがくつついてしばらくした頃。

「海人君、海人君！ ビッグニュースだよ！」

スマホを手にブンブンと振りながら、燕さんが教室に入ってくる。

「何事かとクラス中の視線を集めながら、俺の前の席に座ると、スマホの画面をこちらに見せてくる。」

「これだよ！」

「おお？ おおおっ！」

画面に映し出されていたのは近衛紅葉さんからのメールで、まさかの交際報告だった。

「ついにガクト君告ったか!？」

「いや、もしかしたら紅葉からかもだよ」

陰ながら応援していた二人の交際報告に二人揃って笑顔になる。

「良いなあ〜紅葉ちゃんは意中の島津君ゲットだし、最近ちよつかい掛けてた大和君は京ちゃんとかくつついちゃうし……どっかの誰かさんが横槍入れたせいでね〜っ」

ジト—つとした目で燕さんに睨まれるが、それつてももしかしなくても私のことですか？ てか、なんでそれ知ってるの!?

「まあ、それは今更どうでもいいとして、どっかにいじりがいのありそうな私好みの男子は居ないものか」

「葵君は？」

「ないから………というか断つちやつたし」

「ふ〜ん。ん？ んん？——つて、ええつ!？」

まさかのまさかの既に葵君振られてた事実には驚きを隠せなかった。聞くにこつちに転校する際に告白されたらしいが断つたらしい。

散つた葵君へ黙祷……………

「何してるの?」

「いや……………」

燕さんにツッコまれ、目を開くと燕さんがじつとこちらを覗き込んでいたようだ。

「いつそのこと海人君、私と付き合わない?」

一瞬何を言われたのか分からなかった。えっ? 俺今告白されたの?

「海人君も何気にいじりがいあるし、何より私より強いって条件も海人君はクリアしてるし——『ちよおおおと待つたああああ!!』——ふぎやつ!？」

席を立ち、こちらに近づいて来ていた燕さんとの間に百代が凄いい勢いで割り込んでくる。

「ヒトの婚約者に手を出そうとは、いくら燕でも許さんぞ!」

気を荒くした百代が燕さんを睨みつけているけど、待つて! だから婚約者つて……

「……あはは、冗談だよ」

そんなことを言いながら燕さんが百代に返しているが、途中、俺の横を通り過ぎる時に囁いてくる。

「モモちゃんに飽きたら私のところ来てもオツケーだよん♡」

「つーばーめええええ!!#」

キレた百代と燕さんの鬼ごっこが始まった。

そんなこんなで賑やかなドタバタとした川神学園での一年は過ぎ、卒業式を迎えることになった。

「どうしてこうなった!」

「なんだ不満があるような言い方だな?」

「当たり前だ！卒業式終わって帰ろうとしたら、いきなり父さんと鉄心さんに強制連行されて、着替えさせられて、これだ！」

現在、海人君の目の前には白無垢を着飾った百代ちゃんがあります。場所は川神院です。

「私では……嫌ですか？」

涙を浮かべ、上目遣いに海人を見る百代。

「うっ……いい、いやそんな事はない！」

「その……凄く綺麗だ、百代」

「ありがとう。海人」

笑顔になった百代を見て、海人もいい加減覚悟を決めないと駄目かと思ひ始めたところで、部屋の扉が勢いよく開き、一子が飛び込んでくる。

「準備が出来たみたいです！お姉さま、海人義兄さま！」

「——って!?一子ちゃん気が早いつて!!」

「そんなことはありません！さあ皆さん待たせておりますよ。行きましょう、あ・な・た♪」

「なっ!?!……くっ……」

完全にペースを握られた海人君であった(笑)

それからドツタバツタの式が始まり、皆から祝福される2人…これにてこの物語は終わり告げる。

愛し合う2人に幸あれ☆